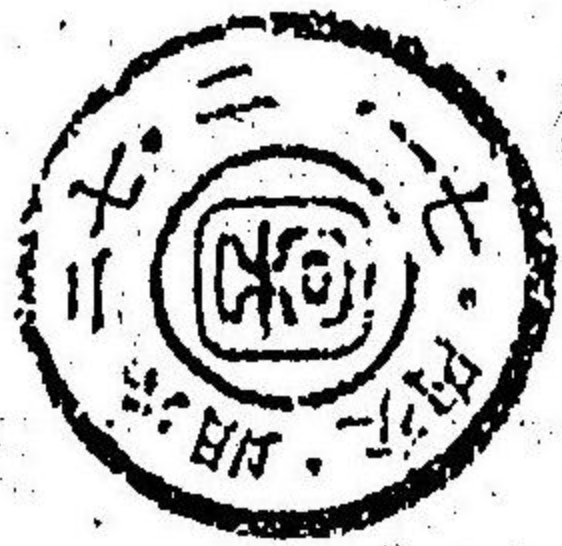


I-2J42



18-398

宗教大會報道



八洲蟠龍師友會

序

八洲蟠龍師は予の師友なり。予か嚮きよ佛教の眞理を研究するの志を發したるもの。蓋し亦た師か薰陶開導の力與りて多しとす。師昨年八月を以て米國市俄高府の宗教大會に赴き。彼の世界萬國宗教家一堂の上に集り。綺羅星の如き中央に立ち。滿場喝采の中に。佛教の眞理を宣揚し。大に歐米今代の思想ある數万の人士に。佛陀の甘露法水を注ぎ。以て大法西漸の氣運を推進したるは。予か日本十万の僧侶に代り

て師に謝する所ありとす。師既に歸朝。西京に來り。各地に於て演説するや。予毎に陪伴して傍聽の榮を辱ふ。會心の處あれば。之を筆記して。以て他日參考の用に供す。近頃興教書院。師の演説を集めて。以て世に公にせんと欲す。予乃ち零雜せる手記を集めて。以て師に呈す。師因りて閱刪を加へ。略は秩序を立て。書院に與ふ。此小冊子即ち是なり。

明治二十七年一月下院 中西牛 郎 識す

宗教大會報道

歐米社會の觀察

西曆紀元一千八百九十三年。即我大日本明治二十六年五月を以て。北米共和聯邦。美紫巖湖畔市。俄高の新都府。開設したる。大博覽會は。誠にこれ。ゴロンパスが新世界を發見したる。四百年の紀念祭。よひて。利の。又た行く。將さに。盡さ。なんとする。第十九世紀。平和的進歩的。文化。的。劇幕の。終局を。告げたるものあり。と謂ふ。るを得ず。直へ。ある。哉。宇内の。眞。宇内の。善。宇内の。美。宇内の。奇。宇内の。利。宇内の。巧。を。此。儘。々。たる。數。英里。四方の。博覽。場。に。集。めて。以て。世界。列國の。耳目。を。驚。したる。現。世。紀。終。局。の。一。大。活。劇。なり。而して。予。輩。は。日本。帝國の。一。臣。民。日本。佛。教の。一。信徒。自然の。好奇。者。人類の。觀察。者。眞理の。批評。者。漫遊の。旅行者。として。端。なく。も。此。一。大。

観場に臨みたり、予輩頑鈍なりと雖も亦た聊か五管の感覺を備へ、思魯なりと雖も亦た聊か内管の思想を有す、豈に此一大現象に對して一大感想を惹起する所なしとせんや、抑も方今の時代の歐亞文化衝突の時代なり、黃白人種競争の時代なり、東西勢力衝突の時代なり、而して世界文化の大陽は嘗て煌々煜々たる輝光を以て東洋を衣被せしめたるにも係りらず、今や黯淡たる夕暉の影を東洋に遺し、炎輪を驅り、大空を蹴り、ウラル山嶺を踰へて西方に進み、歐州の天地に方さに日中の勢を示し、更に大西洋を渡りて、益々西進し、米洲の新世界に紅旭曠々、の勢を示めし、此恩光に背する黃色人種は事々物々の止に於て此恩光を頂上に戴く、白色人種の爲めに壓倒せられ去らんとするものは果して何んぞや、予輩は以らく、黃白人種勢力の盛衰消長、人種の優劣に存するにあらずして、思想開發の互に相反對

するに存するなりと、予輩不肖が族と雖も先づこの一大命題を分拆細説し、敢て以て賢明ある我邦人士に實さるべき事なり、東洋西洋文化の事物は極めて多端にして複雑なりと雖も、總して之を論ずるときは、皆一大思想の裡に概括せらるるものなり、東西文化の進歩は此一大思想の開發なりと謂ひざるべからざるあり、而して西洋の思想の客觀的に向ふて進み、東洋の思想は主觀的に向つて進み、之れ即ち東西文化の方向を異にする所以にして、今や黃白人種互に生存競争の場裡にありて、其勢力の進退し消長するも、其故亦た此に外ならざるあり、抑も白色人種之思想が二千年來外界即ち客觀的に向つて開發したるものなり、之を各般の事物に徴して知るべきなり、蓋し歐人が我が東洋各國民と異なる所は、第一は法律思想の夙に我先ちて發達したる事、これなり、第二は富の生産を重んずること、これなり、第三は有

形科學の進歩是れなり、第四は實行の能力に長ずること、是なり。第五は萬事自家の主義を擴張するに熱心あること、是なり。是れ歐族文化の他に異なる所以にして、其源底を推究するときは、白人種思想は二千年來、外界即客觀的に向つて開發すと云ふ一大原因に歸納すべからず、ある可らず、何を以て之を言ふや、古代より歐人法律の思想は、所有權と自由權とを鞏固にすと云ふ主義を以て之が基礎をすること、は争ふ可らざる事實なり。抑も彼等は我東洋人に比較すれば、何を以てか此の如く所有權と自由權とを重んずるや、豈に彼等が外界に於ける土地若くは物件を占領して、我有とし、之に由りて内心及び肉欲の快樂と需要とを満足するの念熾んなり、是を以て、我東洋人に於ける土地及び肉欲の快樂と需要とを満足するの念熾んあるを以ての故に、非ずや、彼等唯だそれ外界に於ける土地及び物件を占領して、我有とし、之に由りて内心及び肉欲の快樂と需要とを満足するの念熾んなり、是を以て

て所有權を重んぜざるを得ざるなり、然れども、徒に外界を占領して、我有となしたる而已にして、之を使用し、若くは之に由りて生ずる各般の交渉をば、我意の如くすること能はずんば、何の利益あらん哉、此に於て更に進みて、我が行爲をして、可成的に我意に出でしめ、他の干渉を受けざるを以て、目的とする所の自由權を重んぜざるを得ざる、是れ所有權を重んずれば、亦た從つて自由權を重んぜざるを得ざる、所以なり、而して此所有權と自由權とを鞏固にするは、即ち歐米法律の基礎なりと謂はざるを得ざるなり。夫れ然り、白色人種法律思想の我が東洋に先ちて發達したるの源因は、彼等が外界を占領して、我有とするの欲望に基きたること、此の如し、而して此の如く、外界に於ける土地若くは物件を占領して、我が有とし、之に由りて内心及び肉欲の快樂と需要とを

満足するの結果は、果して何事かを現出するや、即ち富の生産に
外ならざるなり。夫れ富と何れぞや。豈に土地若くは物件を變
化して之に附するに、吾人に快樂と便利とを供するべき性質を以
てする者に非ずや。然らば富と所有權との始終相伴するものに
て、所有權なければ富を生産すること能はず。所有權なければ富
を消費すること能はず。之れ亦た白色人種が外界に向ふて獨り
思想を開發したるの結果は、富の生産を以て終局の目的とせざ
る可らざる所以なり。抑も白色人種が古代より内界に向
つて發達せしめて、外界に向つて發達し、外界を占領して我有と
するの欲望、夙に熾んに、法律の思想之に由りて生長したるもの
は、人類の歴史に於て二千年以上の事實ありしが、然り而して
此事實は二千年間の久を経て、歐洲文化の金字塔を築き立て、今
や富の生産を以て之が尖頂とするに至れり。

歐族が欲望を外界に向つて開發するの結果、法律の思想とな
り、富の生産となる。此の如きものあり、更に其智識を外界に
向つて開發するの結果、即ち有形科學の進歩となり、天文、物理、
化學、生物等悉く之れ有形の現象に對して、觀察、經驗の方法を應
用し、或は顯微鏡の如きは肉眼の及ばざる所を補ひ、或は顯微器
の如きは天体の光線を分解し、或は驗温器の如きは以て熱度を
測り、寫眞術は光線を雇ふて畫工となし、蒸氣機關は水火を驅り
て馬力に代へ、輕氣球は天空を翔し、電氣の音信を通じ、て万里を
比隣となし、燈火を點し、て不夜城を現出し、化學上器械上の發明
は、因りて以て戰法を一變し、化學上生理の發明の因りて、醫
術を進歩し、凡そ吾人が今日に方りて万有を制服し、自然力を利
用するは、科學の力にあり、吾人が富を生産し、交通を
便利にするは、科學の功にあり、吾人が富を消費し、交通を

宇宙の美妙を顯はすは科學の力にあらざるは、吾人が万有の秘奥を扶り天法を明にするも亦た科學の力にあらざるなし。而して富の生産と法律の思想とは彼が如く吾人の欲望に發し、科學の進歩は此の如く吾人の智識に發すと雖も、共に皆思想を外界に向つて開發せしめたるの一大原因に基くものにして、是れ其原因既に同じとす、而して今日に方りて科學の進歩は殆んど吾人の欲望を達せしむるの最大手段となるを以て、其結果亦た同一の點に歸着するものありと謂はざるを得ざるなり。蓋し權利は占得を以て目的とし、學術の知識を以て目的とし、知識は又利用を以て目的とす、而して占得知識利用の三個の物は、白色人種が是れ皆外界に於て、其思想と欲望とを擴張し、遂に天地万有を擧げて我有に歸せしめんと欲する所以にして、今日歐米文化の淵源は全く此に存するなり。

白色人種は、先天的に此主義を懷抱して、此世界に現出したる者あり、即ち彼等が自ら信して以て自己の任務なりとする所のものは、全く外界を占領し天地万物を以て吾有に歸せしむるの目的に外ならず、而して其文化一切の事物、即ち宗教の如き道德の如き、法律の如き、藝術の如き、兵力の如き、商業の如きは、固より此目的を達するの具たるに外ならざるものありとす、然して外界に於ける天地万物は、或ひは限りあり、或ひは盡くることありと雖も、彼等の欲望は限りなく、盡くることなし、乃ち其勢たる彼我自他の間に衝突を生ぜざるを得ず、此に於て乎白色人種は、古代より全力を擧げて之を生存競争の活動に用ひ來りしが、今や一の國家と他の國家との間に起る生存競争は、併呑主義となり、外交談判となり、殖民政畧とありて現はれ、各國の平和は恒に危機一髪の彌縫を以て維持せらるゝ、又過ぎず、又同一國家の間に起る生存

競争の、貧富の不和となり、職業の競争とあり、労働者の不平となり、治者被治者の軋轢となりて現はれ、表面藹然たる社會は、自ら其中に慘憺たる殺伐の氣象を含むものあり、是れ亦た白色人種が、外界を占領し天地萬物を以て吾有と歸せしむる、自然の結果ありと謂はざるを得ざるあり、
故に白色人種が生存競争の勢力に富めるを、到底他の異色人種の企及する所にあらず、今日に方りて彼等の精神とする所を極説すれば、他の異色人種を生存競争場裡に壓倒し去り、遂に天地萬物を擧げて吾有とするにあらざれば止らざるなり、亞非利加之の黒色人種、亞墨利加本の銅色人種の如きは、或は白人の爲めに驅逐せられて其土地を失ひ、白人の奴隸とありて其獨立を失ひ、彼等の種族は日に月に衰滅に就かんとするの現況あり、而して歐洲各國の勢力は東洋各國の上に加は、り世界の寶藏と

稱せられたる印度が大英の屬國とありし、遂に既往の事に屬し、安南暹羅亦た半は其獨立を奪はれしは、更に近日の事に屬し、朝鮮の危急は風前の燈の如し、而して我邦及び支那の前途は果して云何ん、是れ皆白色人種が我が東洋を來りて生存競争の活劇を試みたるの結果に非るはなし、而して白色人種が此生存競争の激烈なる勢力は、果して何つくより生ずるやと問ひ、即ち彼等の思想を客觀的に開發し、外界を占領し、天地萬物を擧げて吾有に歸せんと云ふ、當初の觀念に起因するものなり、然りと雖も更に他方より之を觀察するときは、白色人種の弱點は其強點の裡に伏し、亡滅の命運は其全盛の生活に寓す、何とあれば、白色人種が其思想を客觀的に發達し、外界を占領して我有となすの主義は、彼が如く法律思想の發達を促かし、彼が如く富の生産を進め、彼が如く有形科學の進歩を現はし、又之に加ふる

に百般の智識と經驗とを實際上に應用するの能力は、學理に
 れ、宗教に於て、習慣に於て、自家の主義を堅持して失はす、更
 を擴張し他をして我が主義に同化せしむるの熱心とを以てし
 其生存競争の目的を達するに猛勵にして、敏銳なる復た決して
 他の人種の企及する所に非ずと雖も、所謂貧富の不和と云ひ、職
 業の競争と云ひ、労働者の不平と云ひ、治者被治者の軋轢と云ひ
 今日彼等にして、生活の奴隸となり、肉欲の奴隸となり、富の奴隸
 となり、利己主義と個人主義とは漸やく跋扈して、社會の全局を
 支配せんとするの勢あるは、是れそれ禍機既に隱微の間に潜伏
 するものにして、歐米各國が今日表面上猶は幸にして平和を維
 持することを得るは、抑又紅爐點雪なりと評し去らざるを得ん
 哉、故に今日に方りて、白色人種の欲望を抑へて制裁を與へ、競争を

制して平和を輸入するの勢力あるものは、宗教を除いて外に求
 むべからず然り而して、千有餘年間白色人種の信仰を支配した
 る基督教は何の故に此勢力をさやと問ふ者あらば、予輩一言以
 て之が理由を説明せざるべからざるなり、蓋し基督教が千有餘
 年の精神上道徳上、洪大なる感化を與へたるの功蹟は、人類の歴
 史に銘鏤して磨滅すべからずと雖も、基督教は教理上の性質と
 して、白色人種を抑へて制裁を與へ、競争を制して平和を輸入す
 るの勢力ある者に非ず、何となれば、歐米今日の文化は、白色人種
 が外界に向つて其思想を開発せしむるの結果あれば、今日に方り
 て若し歐米文化の短處を補ふ可きの宗教を以て必要ありとせ
 ば、其宗教の内界に向つて彼等の思想を開発せしむべきの宗教
 ならざる可らず、然るに基督教の性質を教理上より分拆するに

基督教の吾人の思想を外界に向つて開發せしむるの宗教にして、吾人の思想を内界に向つて開發せしむるの宗教にあらざる故に基督教を以て歐米文化の短處を補ふものは恰も是れ火を以て火を救ひ、氷を以て氷を救ふの類にして、偶々以て其勢を助長するに足るも、決して之を救止する能はず、予輩乞ふ、又た其理を説明せん

基督教は天下諸教の中にありて、著明ある一種奇異の特性を備ふるものにして、第一其信奉する上帝は、客觀的の上帝にして主觀的の上帝にあらざる、第二人類を以て宇宙の中心とし、天地万物の至く人類の爲に創造せられたるものにして、人類の一切万物を足下に蹂躙するの權威あるものとし、第三基督教は其教を信奉するものを以て上帝の選民とし、其教を信奉せざるものを以て異邦民とし、之が間に區別を設けて愛憎の意を挟む甚だ嚴酷なるものあり、故に基督教は人類の思想をして、外界に向つて開發せしむる勢力あるも、内界に向つて開發せしむるの勢力なき、何となれば、其最大真理とする所、獨り客觀的のものはなり、又た基督教は白人種が外界を占領して吾有となし、以て彼等が無限の欲望を逞ふせんとするの主義を助長するものなりと謂はざるを得ず、何となれば、一切万物を以て獨り人類に服屬するものなりとすればなり、又た基督教の一の國家と他の國家、一の人類と他の人種との生存競争をして、益々激烈あらしめんとするの傾向あり、何となれば、基督教國と異教國との間に區別を設けて、大に其待遇を異にするものあればなり、之を一言するに、基督教の其教理上の性質より、今日歐米文化の長處を助長するに足るも、其短處を救済すること能はざるものなり、千有餘年間基督教が白色人種の文化と相提携して進歩の途に上り、以て今日

基督教の吾人の思想を外界に向つて開發せしむるの宗教にして、吾人の思想を内界に向つて開發せしむるの宗教にあらざる故に基督教を以て歐米文化の短處を補ふものは恰も是れ火を以て火を救ひ、氷を以て氷を救ふの類にして、偶々以て其勢を助長するに足るも、決して之を救止する能はず、予輩乞ふ、又た其理を説明せん

基督教は天下諸教の中にありて、著明ある一種奇異の特性を備ふるものにして、第一其信奉する上帝は、客觀的の上帝にして主觀的の上帝にあらざる、第二人類を以て宇宙の中心とし、天地万物の至く人類の爲に創造せられたるものにして、人類の一切万物を足下に蹂躙するの權威あるものとし、第三基督教は其教を信奉するものを以て上帝の選民とし、其教を信奉せざるものを以て異邦民とし、之が間に區別を設けて愛憎の意を挟む甚だ嚴酷なるものあり、故に基督教は人類の思想をして、外界に向つて開發せしむる勢力あるも、内界に向つて開發せしむるの勢力なき、何となれば、其最大真理とする所、獨り客觀的のものはなり、又た基督教は白人種が外界を占領して吾有となし、以て彼等が無限の欲望を逞ふせんとするの主義を助長するものなりと謂はざるを得ず、何となれば、一切万物を以て獨り人類に服屬するものなりとすればなり、又た基督教の一の國家と他の國家、一の人類と他の人種との生存競争をして、益々激烈あらしめんとするの傾向あり、何となれば、基督教國と異教國との間に區別を設けて、大に其待遇を異にするものあればなり、之を一言するに、基督教の其教理上の性質より、今日歐米文化の長處を助長するに足るも、其短處を救済すること能はざるものなり、千有餘年間基督教が白色人種の文化と相提携して進歩の途に上り、以て今日

に至りたるもの、亦偶然ならざるあり、之に反して我佛敎の如きは吾人の思想を内界に向つて開發せしむるを以て、歐米文化の短處を補ふには尤も適切なり、蓋し佛敎の主とする所は、心界に於て廣大元限なる境界を開き、吾人の心性をして至美至妙に發達せしめ、凡そ眞理也、福祉也、平和也、輝光也、我が心に充滿せしめ、吾人をして内に自ら満足して、其外界に向つては、法爾本然の理性を照して能く之を平治するの力あるものなり、之を一言すれば、佛敎の目的とする所は、吾人をして外界を占領せしむるに在らずして、内界を占領せしむるにあり、抑も内界あるものは無形無質にして、限界なきものなり、故に吾人は云何程内界を占領すとも、彼我自他の間に衝突を生ぜざるなり、唯だ夫れ彼我自他の間に衝突を生ぜざるを以て、従つて亦た彼我自他の間に競争を生ずべき道理あり、これ東洋佛敎を信奉する各國民が、法律權理

の觀念に乏しと雖も、道德の感情に富み、有形の進歩なしと雖も、無形の思想を有し、人類生存の競争力に於ては薄弱なりと雖も、情欲の克制力に於て強大ある所以なり、我東洋人が佛敎眞理の感化に由りて、主觀的に其思想を開發したること此の如し、故に予輩は竊に謂ふ、嚮きよ彼れ白色人種文化の大勢を支配するものをして、基督教にあらすして我佛敎をらしめは、白色人種の思想の一方は客觀的に向ふて進み、一方には主觀的に向ふて進み、外に物貨的の進歩あり、内には精神的の進歩あり、有形無形互に相提携し、或は完全圓滿ある眞正文明の域に臻達せしものあらん、而るを客觀的に其思想を開發するの文化に加ふるに、客觀的に其思想を開發するの基督教を以てす、恰も是れ洪水を救ふに洪水を以てし、烈火を救ふに烈火を以てするが如く、白色人種の進歩獨り一方に偏し、其物貨的の進歩

と生存競争的の勢力との業に既に其絶頂を達するにも係はらず、危険の方に漸く膨脹して、泰西文化の大勢漸く破壊せんとするが如き疑憂を有識の士に抱かしむるも、亦た宜べならずや。然らば今日に方りて、歐米各國が基督教以外に新宗教を求め、漸く我佛教の眞理に歸依するの傾向を見はすものは、眞に是れ自然の大勢なりと謂はざるを得ず、之れ予輩が今日を以て世界宗教一大革命の氣運なりと評する所以にして、而して此宗教上の回市俄高市世界大博覽會に附隨して開設したる宗教大會は果して焉くより生ずるの現象なる乎、即ち以て此宗教革命の大氣運大轉機より生ずるの現象なりと稱せざるを得ざる也。抑も佛教の眞理は中道實相の眞理にして、有見に偏せず、亦た空无の見に倚せず、差別中に平等の理体存し、平等中に差別の事相

存す、内外を合して一となし、事理を該して偏せず、故に佛教の唯識所變と説き、心外无別法と説き、三界唯一心と説き、蓮華藏界と説き、専ら主觀上に於て眞理の大本を立つと雖も、決して有形の事相を捨てず、決して物質の進歩を捨てず、決して國家の存立を捨てず、決して富強の事業を捨てず、之れ古代佛教の我邦に入りてより以來、高僧碩徳踵を接して輩出し、或は土地を拓き、或は技術を進め、或は王法の制定を翼賛し、或は對外の士氣を鼓舞し、我國家古代の文明富強は佛教大に關りて力ある所以あり、故に佛教を去て歐米各國に慈悲光明の感化を及ぼさしめば、必ず現今文化の缺點を補ひ、物質的文化を進めて、精神的の文化とあり、有形的の文化を進めて無形的の文化となし、競争的の文化を進めて平和的の文化となし、偏執的の文化を進めて中道的の文化とあり、亦た今日我邦の國家を振興し、元氣を鼓舞し、國家

的の思想と對外的の思想を奮發するの勢力あらんことは予輩の信じて疑ひざる所あり然らば今日又方りて歐米文化の缺點を補ふの勢力あるものは佛教あり我邦の權威と光榮とを發揚するの勢力あるものも亦た佛教あり之れ吾人一個の私見に非ず世人或は吾人の言を疑ふものあらば吾人が他日宗教大會の光景を擧げて諸君に報ずるを俟て察知し給へ

京都知恩院に於て

前席

満場の各位本日九州佛教俱樂部員諸氏が發起せられ私が今回北米市俄高府萬國宗教大會に出席し無事に歸朝したるを祝せんとして歓迎の會を設け本日の趣を開かれ其の大會に出席した顛末を演説して呉れよと云ふ御依頼に應じて只今此演壇に登りました譯であり升依りて私の本日一場の演説を前後二席

に分ち前席に於ては私が宗教大會に就て目撃して感覺を惹起したるを一通り演説致し後席に於ては此の宗教大會の結果に對して私の意見を述べて以て諸君の消聽を濟す積りであり外(謹聽)

抑此節日本佛教十二宗三十派の内より萬國宗教大會に臨席致しました者は臨濟宗の釋宗演氏天台宗の蘆津實全氏眞言宗の土宜法龍氏及び野口善四郎氏と一昨年來渡航滯米し居られし平井龍華氏と私とを併せて一行六名でありました此六人は各日本佛教を代表したるものとは云へども皆あ一個の宗教家として一個人の資格を以て出席したる者あれば何れも一宗一派を代表し本山より派遣せられたる者でありません特に私の如きは九州佛教同盟會と有志の贊助に由りて私費を抛ち渡航したる者あれば其の賛成補助者と云ふ佛教諸宗の僧侶信者

達が賛助したるもので、決して一宗一派を代表して出席したる譯ではなく、眞宗本派の僧侶とい稱へて居りましたけれども、完く一個の宗教家として、一個人の資格を以て出席したる者である云をば、篤と御承知を求めて置かねばなりません。借て我等一行、昨年八月四日を以て横濱を出發し、太平洋十二日間の海程を経て、パンクパー港に達し、夫れより直ちに加奈陀太平洋鐵道に依り、五晝夜の蒸車を驅りて、北米共和聯邦中工業實業の新都府たる市俄高府に到着しました。然るに肝腎の宗教大會に就いては、發途の始めに西京に在りては、九州俱樂部の諸有志、東京に在りては、明教社、佛敎學會、其他諸宗の高僧、又は學士、博士等の諸有志が、炎熱の時候をも厭はず、宗教大會に對する示談會を開き、親切なる注意を添へて送られましたゆへ、私共も注意に注意を加へ、市俄高府に到着するや、直ちに大會の事情を探檢しました。

所、私共が日本に居りて想像したる所とは大いに違ふてありました。諸君も御承知の通り、私共が最初日本に在りて、此の宗教大會に臨席するの志望を起し、此事を以て同志仲間にご相談するや、反對者と賛成者とが等分の勢をありました。而して其反對者は、東京にある大道、歐米の耶蘇教徒が他教口同音に喚び立て、此の國宗敎本會の歐米の耶蘇教徒が他教徒を恐嚇する爲め、示威運動である。彼等は必ず多数の勢力を以て他教の出席者を壓伏するの手段を講じ、事に依りては上帝の存在と云が如き、耶蘇敎の極め、肝腎ある問題を持ち出して、議案となし、多数決を以て之を議決し、我輩佛敎の出席者をも無理遣りに屈伏せよと云ふ。以て其勢を張らるゝ知る可らず。然らば我輩佛敎者は此の宗教大會は乃出席せざるに若かずと唱へ我等一行の出席者も、之れが爲めには大膽に進路を遮られまし。

た然るに會地に往いて實況を察するに、決して左様の事でない
斯の如き想像の捕風捉影の空想にして、無用の心配でありまし
た、何せあれば、原と此の宗教大會の成り立ちが、此の如き性質の
ものでない、抑も此の宗教大會の成り立ちたるや、天主教會が發
企したるものでなく、又希臘教會が発企したるものでなく、
又新教の或る教會が主唱したるものでない、唯だ此節市俄高
世界大博覽會に關係したる者と、新教僧侶の自由思想を懐ける
人物とが起ちて之を主唱し、學者紳士の流が、交々之を賛成した
るより組織せられたるものであり、升而るに人情思想は何所も
同じきもので、其始め招待状を世界各国の教會に發するや、之に
反對するもの既に尠ならず、乃ち英國の國教たる監督教會は我等
が信奉する上帝無限の眞理は、人間の得て討議すべきものに非
ずと云ふの口實を以て先づ之を謝絶し、次に土耳其皇帝は、勅令

を以て其國教僧侶の出席を停められたと云ふ、次に天主教會も
之に反對する者多くして、全世界の宗教上よりして云ふとさ
吾が日本も同じく反對者と賛成者とは亦た等分の勢にてあり
しあり、然らば米國內部は如何と云ふ、是れ亦た異論百出して鼎
の沸くが如く、宗教大會委員長パロース氏を始め、迎も此の勢
にては宗教大會は纏らざるものならんかと、心配を焦し、一時は
殆んど攻撃と失望との重圍中に陥り、我等一行が市俄高府に到
着せ去頃、彼れは避暑を名義として數百里の外に趣き、不在な
りしも、其實聞く所に據れば、難局を避けて他方に趣きしやに評
判した位でありました、斯の如き景狀あれば、我等一行が市俄高
に到着せし頃の評判は、外々の各種の會議は行はる、とも、宗教
大會だけは迎も纏る認は、あゝ、世界の各宗教徒も、委員長より特別に指名
あるまい、特に目的したる日本佛教徒も、委員長より特別に指名

して招待したる、島地、黙雷、南條、文雄の二氏すら、事よ托きて招待
 を辞したる位あれば、彼等へ迎へ來らざるべしと断念して居り
 し有様でありました。然るに我等一行が市俄高府に乗り入りた
 りとの風聞一朝全市に傳播するや否や、スワ日本僧侶が乗り込
 み來たぞ、彼等は五千卷の經文を携へ來れり、彼等は數万卷の施
 本を運搬し來れり、彼等へ如何ある思想と問題とを普へ來るぞ
 と、既に來らざるものと断念しある中に突然來會したるがゆへ
 恰も夜討に遭ふたる軍勢の如く、周章狼狽斯に至つて、是れ迄議
 論鼎沸、容易に纏るべくも見へざる。耶蘇教各派の有志者も所謂
 兄弟牆に闖くも外、其侮を禦ぐの譬に洩れず、誰れ計ふとなく、誰
 れが仲裁するどなく、思想と思想が思ひ合ひ、腦髓と腦髓が感
 合ふて、忽ち一致聯合して、宗教大會を開く事となり、昨日まで激
 烈ある爭論をなし、睨み合ふたる怒りの眼も、今日は忽ち愛憐の

睨りと轉じ、完爾笑ふて互ひに手に手を握り合ひ、開會の運びに
 立ち至りしは、何より芽出度幸福にて、我等一行が大會に赴きた
 る劈頭第一の出來事にて、先づ宗教大會に就ての紀念すべき漸
 であり升(大喝采)
 我等一行到着の景況の概略此の如き譯でありました。備て愈々
 開會の日も近つき、委員長ハロース氏、書記パイプ、ス子ルの二
 氏も歸り來りしゆへ、漸く面會して、大會の模様、諸般の狀項等、仔
 細に聞き、議事日程も既に一々質問せしに、私共の豫想とは大に
 に違ふて、頗る寛大自由なる組織であり、升其故は宗教會議と云
 へばとて、國會や縣會見た様な世間普通の會議の如く、議事日程
 に就て討議の末多數を以て取捨を決すると云譯であく、彼の議
 事日程の豫め議すべき項目を網羅して、目安を立てたるものな
 れば、此の目安に就て各宗教各々得手に題目を定め、論文を造り、

朗讀演説を爲すなり、例へば、議事日程に上帝の存生と目安が有
 るから、天主教も、基督教も、佛教も、儒教も、波羅門も、希臘も、皆なの
 宗教が口々散展に、上帝は人間の様を固体の意思感情ある神が、
 居るじやの居らぬじやの云様な、甲論乙駁是非を弁論すると
 にはあらで、天主教や、耶穌教は確と居るものと論ずべし、ユニ
 テリアンの如きは固体の神は居らぬとも弁すべし、又た佛教の
 如きは別に佛陀の存在と云か、佛陀の身相と云様な、九ると上帝
 への關係せぬ佛陀のとを述ふるも、決して答ひる所はなきなり、
 唯だ各宗教が持つ所の特色の眞理を、此の議程の目安に依りて
 開陳するを肝要と去て、各々演述致すとすれば、眞に萬國宗教の
 一大公會であります斯の如き組織なれば、宗教大會は世界宗教
 の演説會見た様な譯なれども、又た此の外に各宗教一々に天主
 教室、基督教室、佛教室と、其の受持の室を興へてありて、佛教室の

如きは現に六百人を入るべき一室を興へられ、會議中交るく
 此の室に在りて、質問し來る者に、答弁を爲し、解釋を興へ、大ひよ
 利益を施す仕組が出来てあり、此の如き寛大なる組織である
 から、我等佛教者に取りても、自由に佛教の教理をも説明せらる
 、譯なれば、我等一行は之れより、各自に考案を起し、壇上朗
 讀の準備を爲しました、

偕て、開會の當日に至り、私共の旅館より宗教大會の會場、即ちフ
 ロント湖畔美術館迄は四英里半も隔りあれば、朝飯早々より出
 席の用意を爲し、空前未聞の宗教大會、世界諸宗教者の顔見せと
 む言ふべき日あれば、各々法服を裝ひ、紳士馬車を驅りて會場へ
 と馳せ往けり、時は千八百九十三年、即ち我朝明治二十六年の九
 月十一日なり、此の日こそは、實に我等宗教家が、大筆特書して忘
 れ可らざる、佛教開運の吉祥日であり、外、世界平和の泉源が、滾々

として湧き出でたるも此の日である、宇内宗教者が平和的交通の開けたる此の日である、普ねく人類社會に、宗教の大勢力を示したるも此の日である、不完全なる宗教の虚勢偽飾の衣を剥き採り、失墜せしめたるも此の日である、歐米の天地に、文明完全なる宗教が誕生したるも此の日である、平和的宗教界革命軍の戦言を發したるも此の日である、實に此の日こそは、世界幾十万の筆に記され、電信を走らせ、郵便を役し、白雪皚々たる北方諸國より、熱風炎々たる南方各國の端々迄も、釋迦、耶穌、孔子、マホメット、諸聖の徒弟は悉く思を市俄禱の大會に寄せ、幾億萬の人類が一日千秋の思を掛け、希望を賜して待ち受けたる、千載一遇の佳辰、無上幸福の大歡喜日とも云べきは、此の萬國宗教大會開會の日で、有ふと思ひ、舛喝采、備て、會場に着すれば、御者は馬を駐めて我等一行を案内す、會堂

は渺茫たる湖水を後へに去、累々たる市街を前にし、層樓巍々として湖畔に聳へ、宏壯偉大の建築を構へ、館の周圍數千畝、遊園の景狀を爲したるもの、之れなんブロント湖畔アイトパレスのコンピヤンホールであり、舛時已に開會に迫りあれば、參觀者は群々簇々、瀟車より來るあり、地下電車より來るあり、或ひは馬車を驅り、或ひは騎馬を馳せ、流石に廣きアイトパレスの園内も、馬車と人どに充されて、喧闐雜沓名狀す可らざる有り、楡なり、我等一行は案内者に導かれ、群衆の中を押し分け、設けある休憩室に控へたり、頓て開會時間を報じたれば、各國各教の代表者は悉く案内者に導かれて會場に入る、我等一行も之れと俱に會場に進み、集る所の數千の聽衆は、既に堂上堂下に充満し、立錫の地をみ餘さず、歡迎の祝聲と俱に、拍手喝采の響きは萬雷を轟かせり、中央の壇上には、演壇を飾り、左右にハ世界各國各大宗教の代表者

整然として席を占め、堂内には數百本の國旗を縦横に交又し、和
 氣霽々たる瑞雲はコロセヤソ室内に懸き、赫灼たる眞理の光榮
 のアトパレスの堂上に輝けり。
 既にしてエツデ氏は風琴に就き、古百年てう幸福の基と目せ
 られし曲を奏するや、會員一同優美ある風韻を以て之れは和し
 一同音に唱歌を誦ふて開會の式を爲したり、而して會長ボン子
 一氏、委員長パトリス氏、バーバー夫人、其他各國各宗の代表者
 學士博士等、交々起ちて或いは歡迎の演説を爲し、或は祝詞を朝
 讀し、極めて盛大なる開會式を行ひ、終を告げたるは午後三時
 頃なり。
 又手此の際式場の全面に眼を放つて能く觀れば、面白きと愉快
 あると、何とも嘶すに嘶し難き面白きとでありました、其故は、壇
 上第一面の演壇の左の方第一席に席を占めたるの希臘の大

僧正にして、黒白赤の法眼を襲ね、胸には燦爛たる黄金の十字架
 を掛け、頭には巍峨たる高帽を戴き、一見畏敬を示すが如く、第
 三の席に在るは、羅馬加特力の代表者、黒の法服、裾長く温厚の
 風体を爲し、第四の席はメソジスト、洋服の黒奴人、第五第六第七
 の席には、銅色人の波羅門代表者、各々頭には一反木綿を巻き立
 て、一の黄衣、一は赤衣、一は紫衣あり、右の第一席を眺むれば、日本
 の神道家、柴田禮一氏にして、オサ冠、雲鶴の袍を着し、第二席に
 は、錫蘭佛教の代表者、マンマパーラ居士の白衣を纏ひ、第三席
 は、拙僧が黒の法衣を着し、第四席は、蘆津僧正、紫衣に緋文白の五
 條を着し、第五席は、土宜僧正、紫衣に白地金縷の七條、第六席は、洪
 楸禪師、紫衣に紅地の七條を着け、第七席は、野口善四郎氏、通弁を
 兼ね、委員として椅子を占め、第八席は、野村洋三氏、通弁として列
 席し、何れも洋服の黄色人あり、後ろの方には、二聯に椅子を併列

し、印土及び亞細亞地方より来る所の回教徒、プロモサマチ教徒、其他大博士、神學博士、婦人代表者、耶蘇教各派の重む立ちたる人々、整肅として列席し、ニュー・イソングランドの清教徒の魯西亞、舊教と手を握り、世界最古の波羅門教徒は耶蘇新教と椅子を並べ、白色人種は黄色人種と交り、黒色人種は赤色人種と混じ、或は冠を戴き、或は長衣を被り、或は袈裟を懸け、或は十字架を横へ、或は剃髪し、或は長髪を垂れ、有髻の人あり、無髻の人あり、言語を異にし、服装を異にし、人種を異にし、一見すれば堂上集る所の人々、凡ての点に於て皆な悉く異なれり、眞は人類の博覽會と云ふ証言とは申されませぬ、(大喝采大笑)

之れに就て、吾々が僥倖とも云べき一大快談があり、升此の開會を參觀せん、迎集り来る聴衆數千人の中には、學者、教師、宗教家、有爲の志士が澤山でありしが、流石は女權擴張の國はとありて、聴

衆の過半は婦人達なれば、婦女子の人情は婦女子丈けのもので、第一眼の着ひたるは、吾等日本宗教家の服装にて、綾羅金縷華美を装ひ、一種目立ちし服装なれば、滿場聴衆の視線は盡く我等日本人に集り、日本宗教家の服装は、高尚にして華麗あり、優美にして尊嚴なる風采を兼ね備へたりとの、贊美の批評と俱に拍手喝采の聲は、滿場を震動せん計りにて、先づ我等日本宗教家が、外容の儀式的形裝を以て、劈頭第一の勝利を奏したるの實況であり

升(大喝采大笑)

諸君試みに思へ、斯の如きの事柄は、始めより考へたるものでなく、臨時偶然に人機を盪したる僥倖の奇事とも謂ふべし、抑も亞米利加は絹の産出に乏しければ、絹物と云たら、特に税高く、高價あるものあれば、婦人の服装でも、男子の洋服の裏にでも、絹の物を用ゆるは、大概拾萬弗以上のセントルマン(紳士)であり、紳士上

へ彼の國の天皇もあければ皇族もなし、華族もあければ士族もなし、統一平等の平民國なれば、富者が天皇、富者が華族、人の品位の段階は、富より外も等級はなし、依りて平民的の其の中に、高貴の品位を備ひれば、靴に五百弗の衣装を纏ひ、頭に百弗の帽を戴き、足に三十弗の靴を履き、胸に五百弗の時計を懸け、純金の指環を腕環をさらつかせ、之れで貴族、之れで紳士、尊嚴の威風も備ひりて、人の中も光榮あり、彼れ歐米人が富を國家の基本として、有形文明を進めたるも、科學機械を利用して、供給の自由を講ずるも、傲慢驕奢に誇るのも、生存競争となり來るも、各國併呑の大慾心を起すも、總べて富の光榮より暴發するものあれば、彼れ等が外形的風采に注目し、優麗尊嚴の威風あり、華美高尚にして、文明なりと賞賛したるも、亦た無理ならぬとあり、又た其上へに、外教の傳道師どもが、教會金や寄附金釣り出す口實に、日本は野蠻

なり、佛教の田舎教、未開國の宗教、厭世的の宗教、固陋的の宗教、レ偶像教じや、腐敗教じやと、毎も印度亡國の小乘衰頹の佛教を引証して、十把一トからげに悪評するを、眞んまど信じて居る所に、世界博覽會のその中に、未開國が腕前に、美術の手際や工藝品、數千百品陳列し、文明知識の考究に、組織されたる伊佛の美術、巧妙なる御手態と、いざや之れより闘はん、と高評博せし、其續き、頑固野蠻の悪評喧闐、押し分け切り分け進み出で、世界宗教の顔揃ひ、千載一機の唯だ一日、是非の批評は、諸君に任すと、言はん計りに、整列せしその時こそ、そのシモン、ハロー(冷評輕別の流言)の喚び聲も出ず、滿場一聲拍手、唱采寔とに愉快なるを、とどむにてありました、併ら之れは一時の其場の機み、衣の色や袈裟の光計り、で、到底海外傳道の方法は、運ひません吾等一行が宗教大會堂上で、世界諸宗の代表者と完爾、笑ふて手を握りたるは、宗教平和の

開戦約、宣戦状の取り替し、勝負の時期は二十世紀の曉きに在り
 佛教第二の継承者、宗教統一の革命軍隊とも謂つへき青年諸君
 起よ、進めよ、大愉快喝采
 借て次日よりは、豫定の如く職事日程によりての會議なれば、我
 等一行は成るべく早く自己の意見を提出し、餘暇をも得て、緩
 く他の各宗教徒が演説をも批評すべく、亦た名にし負ふ閣龍世
 界大博覽會をも致したければ、我等日本佛教徒の演説は、一同早
 く二日計りに済し度しと、委員長に申込みたるに、委員長中々聽
 さ入れず、今回宗教大會も、毎日數千の聴衆が、或は紐育、或はボス
 トン、其他全國の各地より遠きを辞せずして詰め懸るものは、專
 ら東洋宗教の嶄新なる議論を聽んが爲めなれば、若し公等にし
 て一同早く會場を引き上るが如きとありては、彼等は必ずや失
 望して引き退き、大會の景況も關すへきとあるゆへ、公等は成

る可き時日を引き延されんとを望むとの返答なれば、我等一同
 は止むを得ず委員長の請を容る、事となしままた、然るに日本
 佛教より、野口氏が通弁の責任を負ふて居るゆへ、第一番に濟
 し度とて、先鋒とありて、先登第一に短簡なる一席の演説をせら
 れ、第二番が平井金三氏であり、升氏は一ハ總合宗教論、他は日本
 と基督教の關係と云ふ如きの意味なる二通の演説案を、兼て委
 員長の手許に差し廻しありしに、愈々氏が演説と云當日に至り
 て、委員長は總合宗教論の演説を許せまも、日本と基督教の關係
 論ハ除ひて拒まんとす、然るに氏はツカ、と演壇に進み、基督
 教關係論の演説を朗讀せんとするや、委員長は傍より氏の演説
 を差し止めんとせり、平井氏忽ち憤然として怒りの眼を發き、委
 員長に向ひ、君は何故に余の演題を許さざるや、何故に余が言論
 の自由を妨害せんとするや、君は何人より公會出席者の演説を

差し止るの権力を與へられたるやと、口角泡を吐き、一言は一言より迫り、既に激論に及ばんとせしにぞ、滿場拳を握り、スワ大事が起りたるぞ、宗教大會は破烈するぞと云はん許りの顔色を顯し、此時の私共の心配は何も譬へ難きとでありました、然るに万事に立ち廻り、如才なき大會書記の一紳士の、平井氏と委員長との間に割り入りて、種々仲裁の勞を執り、氣早き委員長なれば、程能く治めて、平井氏は希望の如く基督教關係論を演説する事となれり、偕て平井氏が朗讀せる演説の旨趣たる、約して之を言へば、先づ我國天草の亂、天主教が大ひに國民に禍を流してより耶蘇と云へば我國民舉つて悪感情を懷き、之れが爲め耶蘇教は我日本にはなかく、急に弘り惡ひ、之れは偏へに基督教に對しては氣の毒である、と云より説き起し、終ひに近世に及び、我が日本、今を距る三十年前、米國の先導と紹介とによりて、始めて文

明世界の列に入り、當初米國が我邦に對するの好誼は、誠に謝するに辭なし、今や文明の女神が輝光ある旭の羽衣を振り舞し、翻々として日本の天を翱翔するもの、誰れか是れ米國の賜にあらずと云はん哉、然るに今や我が日本の有様を観るに、日本の幕政末路に當り、諸外國の爲めに瞞着せられ、不正不義なる條約を締結し、爾來二十餘年の星霜を経て、今日に至り、全國幾千萬人の精神の一致して一人の精神とあり、此の不正不義なる條約を改正せんと鋭意熱心するも、奈何せん、歐米先進の各國は種々の口實を設けて我が要求に應ぜず、之れが爲め國家の迷惑國民の苦心する夫れ幾干ぞや、回顧すれば、貴國が其始め、英政府の下に壓制せられ、呻吟せられたる當時の困難如何計りぞ、今や我が國民は之れより甚しきものあり、而して貴國より我が日本に派遣したる耶穌教各派の宣教師は、現に此の有様を目撃し乍ら、未だ嘗

て此の有様を貴國に報せざるは、是れ豈に耶穌教博愛の本旨なるか、之れが耶穌教の正義なるか、又た貴國人民の近頃支那人を放逐するの序でに、無辜なる我日本人をも驅逐せんと欲し、我日本人の米國學校に入學したるものを、モンゴリヤ人種なりとて盡く之を退學せしめたるが如き、是れ亦た耶穌教博愛の本旨になるか、諸君が信奉する耶穌教にして、果して此の如き者なりとせば、予の耶穌教程我が日本國民に禍害を與ふるものはなしと斷言せんと欲す、又た我が日本國民が、耶穌教に對し、惡感情を懷けるも無理ならぬとならずやと演ずるや、滿場數千の聴衆は一同に、セーム、セーム（即ち愧ぢ入る愧ぢ入るの聲を發したり、而して平井氏の之れより甘く論点を轉じ、併ら予の信ず、是れ必ず眞正なる耶穌教徒の行爲にあらすして、偽善ある耶穌教徒の行爲なるべしと云ひ、殘して演壇を下るや、滿場一整立ち上り、一同ハ

ンケチを振り立て、無上の賛歌を示したり、試みに思へ、此れは是れ我が日本佛教徒が、宗教大會に於て、第二の勝利を奏し、基督教徒の膽を寒からしめたる一事なりとす、之れに就ても私は諸君に敬告す、基督教や天主教の宣教師が我邦に来る如く佛教の教師が彼の歐米各國に留錫せば、國際上國民の交際上如何計りの裨益あらん、諸君請ふ奮起し玉へ、
借て、第三番は釋宗演師、佛教の要旨并に因果法と云題を以て、普ねく經論に照し、微密に演したるを以て、佛教の哲理は精確ありとの感想を大ひに惹起さしめたり、第四番の土宜法龍師、日本の佛教と云題にて、大小二乘の教理を概論し、進んで歴史上より佛教が日本に與へたる文化の功績を示し、演し去り、演し來りて同じく聴衆を感動せしめたり、第五番の拙者の番前にて、佛教と云題を以て演し、第六番は蘆津實全師、佛陀と云題にて、何れも大乘

佛敎の深奥なる教理を、種々の点より説明したれば、聴衆の満足
 は一方ならず、歐米多数の人民が、千百年間、佛敎の野蠻未開の宗
 教なりと云ふ妄想の夢は、忽ち十数日間の宗敎大會に由りて全
 く打破せられたり、而して我等一行の日本佛者に加ふるに、印度
 錫蘭佛敎の代表者、ダンマパー居士が、博學にして精確なる佛
 陀論を以てしたれば、此の世界萬國の各大宗敎者を一堂の上に
 集め、又た職見ありて眞理を慕ふと恰も鹿の溪水を探るが如き
 歐米數万の紳士貴女を一堂の上に集め、又た全世界の注目を一
 堂の上を集めたる宗敎大會に於て、我佛敎眞理の一滴は、慥に注
 入せられたりと確信す、是れ私が滿場の諸君に向ひ、我が佛敎の
 此回市俄高府の萬國宗敎大會に在りて、最大勝利、最大光榮を得
 たりと斷言するを憚らざる所でござり、殊（大喝采）
 左れば、我等一行は、世界各國の宗敎家の公會たる萬國宗敎大會

に於て、可及的佛敎の眞理を宣揚し、可及的日本の國光を煥發し
 十分に敬愛と光榮とを博し、或ひは宗敎大會中、又は閉會の後も
 處々の夜會に招待せられ、折に觸れ時に應じて佛敎の眞理を説
 き、彼邦人士をして大ひま注意を佛敎に起さめ、又開會中は會
 場中の質問室に於て、毎日數百千人の群衆を引き受け、交るく
 種々の質問に應じ、現に平井氏の如きは通辨と答辨に責め付け
 られ、日々晝飯さへ喫せざるも多かりし程の多忙に迫られた
 り、之に依て後には我等一言の答解を得たる紳士貴女、日本僧
 侶より此の如き答解を得たりと、誇りて以て榮とするに至れり
 凡そ新奇を好むは人間の風習とは云へども、是れ畢竟歐米文化
 の機運が、我が佛敎の眞理を歡迎するの致す所なるへし、
 然りと雖も、我が日本佛敎が、斯の如く俄かに光輝を北米の中天
 に耀したるは、多少亦た之れが因縁なかる可らき、惟みるに我が

日本政府が、今回閣龍世界大博覽會を以て、我が日本の美術を世界に示し、我が日本の光榮を世界に耀し、我が日本の文化を世界に顯し、我が日本の進歩を世界に知らしむるの一大機會なりと爲し、非常の英斷、非常の奮發に出で、帝國議會の協賛に由りて、六拾万圓の鉅額を此の博覽會の爲めに抛ち、我等一行の到着する前に、既に十分に我が日本の價値を知らしめたるとなれば、我等一行の爲めに、知らず、誠ならず、好準備をあしたるに職由すると考へ、然らば私共は又た我が政府に對し、國民に對しては、厚く謝せねばなりません。

右に述べる所は、我等一行が今回宗教大會に赴きて目撃したる現狀の一斑を諸君に報導したるのでござり、外、諸君若し御退屈がなければ、是れより一步を進めて、私が此の宗教大會に對するの愚見を少しく述べる積りであり、外、待聽々々。

後 席

滿場各位、今回市俄高府万国宗教大會に就て、私が目撃したる所は、前席に述べたる通りであり、升されども徒らに諸君に向つて世界大博覽會は大賑ひであり、た、宗教大會は、万国の宗教家一堂の上に集りて、頗る盛會であり、た、而して日本僧侶は非常の僥倖を得た杯と云ふ丈け、別に何の意義もなき事であり、ます、依りて是れから、更に一步を進めて、抑も歐米の宗教家及び有力家が、此宗教大會なるものを開きたるは、何如なる理由のあることなるか、即ち彼等を促して、此宗教大會を開かしめたるの原因は何如あるものなるかを論究して、以て諸君の愛國護法の志に訴へんと欲するなり、抑も世界万国の宗教を集めて、宗教會議を開かんと欲する計畫は、此回の市俄高府宗教大會を以て、之が始めとするにあらせ、私が聞く所によれば、第十六世紀の頃、歐羅巴の或

る君主が既に此計畫をさせりと云とである、然れども其時迄は世界の氣運が未だ宗教大會を實際に開くことを許さず、此君主の計畫は全く水泡に屬し去れり、而して爾來世界の氣運は級一級より登り歩一歩より進み來り、二百有餘年の歲月を積み、北米聯邦が、コロンバスの新世界發見の紀念祭を表せんが爲めに開きたる、世界大博覽會と共に開かれたるは、抑も之れ如何なる理由なるや、諸君試に想像し玉へ、此地球上唯だ北米合衆國を除くの外は、此宗教大會は得て開く可き運には至るまいと思ひ升北米合衆國あらでは、地處に宗教大會を開くに適當なるの地はあらざるへし、若し此宗教大會をして佛國に開くと計畫するものあらば、佛國の天主教徒は痛く之れに反對すべし、若し此宗教大會をして英國の監督教會は又た激烈に之に反對すべし、若し此宗教大會をして露國に開

くと計畫するものあらば、露國の希臘教徒は全く之に反對すべし、若し此宗教大會をして我が日本に開くと計畫するものあらば、種々の議論紛起して事亦た遂に成立せざるべし、然らば世界は廣し各國は多しと雖も、此宗教大會を開くに適當なるの地は北米合衆國を除きて、他更らば其の處あらざるべし、何とあれは、信教の自由は今日にありては文明世界の通則なるが如しと雖も、歐洲各國今日猶ほ國立教若くは公認教の制度を存し居れり、宗教のことに決して世人が思ふ如く自由なるものに非らざる、唯だ米國のみ真正なる信教自由の道行はれ、其人民も亦た皆一般に自由思想を重んずるの氣風あればあり、是れ乃ち今回宗教大會の米國に於て行はれたる所以ならんと考へられます、然らば此宗教大會を促がしたるの大氣運と如何なるものであるか、私は是れ又就てはマンマパラ居士が一言を開て頗る同

感を表しました。抑も私が同行四人と共に市俄高府に到着する
や否や、此國の事情を知りたる人物を得て、種々相談し度きこと
があり、頻りに其人を求めつゝ、ありしに幸ひなる哉。錫蘭佛教
の代表者たるマンマバラ氏來着しありしを以て、直ちに氏に面
し、居士は今回宗教大會の開けたる理由に就ては何如に見解を
下さるゝかと問ひしに、居士の一言以て私の問に答へて曰はく、
歐米の耶穌教徒の自ら其教を疑ふたり、自ら其教を疑はざれば、
何んぞ世界の各宗教者を集めて公會を開き、互に眞理を比較す
るの必要あらんや」と實にマンマバラ居士の此一言は、今回宗教
大會の肺腑を見透ふし星を指したるの一言と謂ふべし。今日私
が諸君の宗教大會を開きたるの原因は何如なるものぞと云ふ
の問に答ふる所も、亦た此一言の外にいなき譯であります。借
て然らば歐米の耶穌教徒は、何故に自ら其教を疑ふたるかと云

に至りては、是れ實に世界文化の大氣運に關する一大議論であ
り外、なかく一朝一夕の能く辨じ盡す所でのありませぬと
今私が演説の順序此に運び來りたるを以て、聊か簡畧に之を辨
じて以て諸君の御一考を仰ぎます（謹聽々々）借て近世歐米文明
の氣運が、進歩に進歩を重ね、革命に革命を積み、第十九世紀の
結幕迄押し寄せて、終に此宗教大會の開會を促したる迄は、決し
て短い月日ではありませぬ、即ち撰び撰んで之を申せば、第十五
世紀の末、第十六世紀の曉に、歐洲近世文化の一大潮流が生れ出
べき時節にして、所謂火藥の發明、羅針盤の發明、印刷機の發明、
歐洲の戦争航海智識に一大進歩を興へて、社會の進路を一轉せ
しめ、之に加ふるゝ學問の中興と、新世界の發見とを以てしたる
より、古來の習慣信仰智識をも根本的より顛覆し來り、其結果と
して世界の局面に現はれたるものは、即ちルーテル、カルビ、

等が、第十六世紀に於けるの宗教的革命あり、此宗教改革は其餘
 響延ひて各國政教の分離となり、新舊兩教の戦争とあり、因果相
 推して第十七世紀第十八世紀の社會的革命となり、而して佛國
 の大革命は、所謂此社會的革命が絶頂に打ち上げたるものであ
 ります、然るに社會的革命は、唯だ壓制の顛覆、政權の分配及び人
 民政治上境遇の改良を目的としたるものにして、若し之に富の
 生産を以てせざりしならば何の所詮もありません、此に於て第
 十九世紀に至り、海軍、海船、電信の發明を現じ、蒸氣、電氣の機械、
 人間の交通、富の生産に應用せらるゝのみならず、經濟の眞理の
 學者の間に講究せられ、貨殖、政略は政事家の間に貴重せられ、之
 か爲めに全世界の局面は全く一變し、人工極りて天工を奪ひ、天
 利盡きて人利起り、人間無限の快樂、人間無限の欲望をして殆ん
 ど其極に到達せしめんとせり、即ち此回市俄高府も開かれたる

世界大博覽會の如きもの、全く此十九世紀が現出したる富の勢力
 を示めしたるものにして、巧又巧、美又美、富又富、利又利、快又快、奇
 又奇、精又精、何如ある言辞を以てするも評し盡すべき景狀では
 ありません、此の光景は將た何んと形容すべきか、乃ち物質的の
 革命と謂はざる可らず、左れば宗教的の革命、終れば物質的の
 革命を生じ、此三大革命は互に因となり、縁とあり、甲は乙を撞き
 起し、乙は丙を撞き動かし、今や第十九世紀の結幕の、全く物質的
 の革命を以て終らんとするが如き景狀であり、升然るに天下の
 事物は互に複雑なる關係を有するものにして、一事進むとさ
 他事も亦た從つて進まざるを得ず、一物退くとさきは他物も亦た
 從つて退かざるを得ず、偏輕偏重は事物相互の權衡を失ふて動
 亂の基をなす所以なれば、抑も彼れ十六世紀の宗教的革命一
 たび既に端緒を開きて、新舊各派の分裂を生じたるも、未だ終局

の結果に至らずして、社會的の革命早くも之が導火に移され、彼が如く爆裂を致し、社會的の革命も亦た終局の目的に達せざるに物質的の革命傍らより躍り出し、今や物質的の革命殆んど絶頂に達し、人間の肉欲と快樂とは歐米の天地に於て其極に達し、特に世界の富を集め世界の進歩を集めたる、北米合衆國に於て其極度よ達したる現状を見るに至れり、若し果して人類社會の進歩をして其權衡を保たしめ、偏進の患をからしめざるをあらしめば、歐米の宗教と道德とは、現今に倍すること、宜しく千百倍ならざる可らず、然らざれば到底物質的の進歩と權衡を保つ能はざるあり、何となれば社會的物質的の二大革命は、人の自由を擴げ、人の思想を開き、人の智識を變じ、人の情欲を長じ、人の快樂を増し、又人の好悪なる事を爲して社會の秩序國家の成立を薄弱にし、又種々なる社會の禍害を醸生する事にも其勢を援けて

大に力あるものなればなり、左れば今日歐米の耶穌教あるものは、一層十分なる革命を爲して、以て此物質的の進歩を駕馭せざるべからず、斯くありてこそ宗教の効用もあるべきに、歐米宗教上の思想、宗教上の實行は、宗教改革以來毫も其進歩あるを見ず、然れば一言に語れば、耶穌教の力の到底歐米今日の文化を乗据へて、以て人類の進歩を善長にし、高尚なる方向に導びく力なきことは、誰れが見ても明白なる事實であります、(大喝采)然らば此明白なる事實の如何して救ひますか、即ち今回の宗教大會なるものは、歐米の耶穌教徒が始めて眼を此點に開き、到底今日の如き耶穌教の有様で、世界進歩の大勢を支配する能はず、是れ果して我々が信奉する耶穌教の真理不完全にあるか、將た耶穌教の外に眞理なる宗教はなきか、抑も耶穌教一教のみにては此大勢を支配する能はざるも、所謂一矢を折るは易く、十矢を合して

折るは難きが如く、世界各宗教共同の力を假るときは、此大勢を支配すべしと云ふ了見を起したるにあらざるか、喝采をここで、私は此歐米人の了見を稱して、此れぞ此節宗教大會を促がして開かしめたるの大氣運、即ち大原因と申します、(大喝采)此に於て歐米の耶蘇教は、恰も火事を出來せし最初は、家内中にて之を打消さんとせしも、其の火の手の愈炎へ騰るを見て遂に大聲を發し、佛敎來れ、儒敎來れ、回々敎來れ、婆羅門敎來れと、叫ひ出したるにあらざるか、(大笑)而して此の叫ひ出しは、即ち此回の宗教大會にあらざるか、此れこそ聽衆諸君の御一考を煩すべき問題でありますし、よう、(大喝采)

然らば我等日本の佛敎者が、宗教大會に趣きて、優待に與りたるも、亦た理由あることではありませぬ、我々佛敎は、今日に於て大に歐米の天地に進入するの好機會を得たりと思ひます、此事は

既に數年前に、彼のアーノルド氏か「亞細亞の光」の傳播により、又た彼のオルゴット氏等が來朝により、又た海外宣教會杯の通信によりても、私共御同様に大略の事情の存じていました、けれども此節私共が實地彼國に赴き、特に世界宗教の大會中に於て、愈々其香を嗅ぎ附けました、然らば我々佛敎徒が、來る第二十世紀の曉頭に於て、世界文化の舞臺に顯れ、十方無碍の光明と慈悲とを撒き散らし、以て東洋佛敎の基礎を建てるは、今日にありと思ひます、(大喝采)

然るに願みて我東洋佛敎の光景を觀察するも、亦た言ふに忍びざる有様であります、彼の印度佛敎は如何、我等が濟度主釋尊の誕生し玉ふたる印度は、今日は既に外道の蹂躪する所とあり、茫々たる五天竺中一人の佛敎徒あり、唯だ錫蘭の孤島に小乗の一派を存するに過ぎざるのみ、彼の西藏の佛敎は如何、西藏の法王

を以て國王とし、其表面こそ羅馬法王に似たれども、其國民は世界に交通を絶ち、怡も桃源の民の如く、世界の文明に關係するところなし、是れ枯骨の佛敎あり、死馬的の佛敎なり、支那の佛敎は如何、是れ亦た腐敗して起すべからず、而して緬甸の佛敎は如何、其國既に滅亡に近きて佛敎も亦た活氣を失へり、暹羅の佛敎は如何、暹羅は其君臣共に極めて熱心なる佛敎徒なりしむ、此大會の開くる頃には、佛艦の爲めに進入せられ、其港の封鎖せられ、方さに是れ一國擧て震動するの秋となり、遂に一人の代表者を宗敎大會に出席せしむる能はず、而して暹羅の國勢他日に至りて遂に如何に成り行くべきかな計るべからず、然らば今日に當て東洋佛敎國中十萬の僧侶千萬の信徒を有し、學術を有し、殿堂を有し、實力を有し、活氣を有するもの、我日本佛敎を除ひて亦た何所にかある若し我日本佛敎にして大に振起して以て西漸の

氣運に乗せずんば、亦た何國の佛敎ありて之が責任に當るべきや、今日私共日本佛敎者の任務は至大至重あるものにして、佛敎を興すも亡ぼすも私共之が任務に當らざる可らざることを、思ひ升、今や我國の學術、世界政治、世界各々種々の現象を呈し、皆以て我國の進運を援るが如しと雖も、智識は以て獨り國家を救ふこと能はず、政治は獨り以て國家を救ふ能はず、況んや道徳あるの智識ハ愈々國民を腐敗し、信例なきの政治は愈々國民を腐敗去、而して我日本維新以來、開國進取の大活力大元氣は愈將に消滅せんとす、此時に於て學術政治家亦た或は國家の事に懸を投じて失望するものなきにしもあられざる、此の怒濤狂瀾の中に屹立して、獨り我佛敎のみ盛なるが如く、衰ふるが如く、亡ぶるが如く、起るが如く、眞理の光燦爛として我等を希望、光明の大海中に導かんとするもの、現時佛敎の光景なり、

乞ふ是れより諸君と相携へて真理擴張の道に登らん(大喝采)

宗教大會報道終

明治二十七年二月 五日印刷
明治二十七年二月 十日發行

編纂者 三重縣平民 林 傳 治

伊勢國菟藝郡一身田村
大字一身田廿番地

發行者 兵庫縣平民 清水 精 一 郎

京都市油小路北小路上ル
玉本町第六番戶

印刷者 大阪府平民 山 口 恒 七

大阪市西區阿波堀通二丁
目六番屋敷

發行者 京都油小路北小路上ル 興 教 書 院



八淵蟠龍著

開國以來

(菊版三百頁) 近刻

右は今回八淵師が米國宗教大會に臨みて大いに感慨し知識的社會物質的三大革命の歲晚第十九世紀の終期既に各其任務を了り第二十世紀の曉頭更に宗教的大革命を震動し來り人類の思想是れに由りて一變を文化の氣運是れに由りて一轉し我佛教は將來に於て世界列國盛衰興亡の命運上に最大影響あるを看破し更に此の國家動搖し人心惶惑するの中心に立ちて日本帝國千載不拔の國是を建つるは我か佛教を以て内は國家の鴻基を立て外は拓殖の遠征を促すの一事にあるとを看破して百感千想交々集り熱血の注ぐ所自ら此一書を爲せり從來佛教の著書抄らすと雖も未だ斯書の如く卓見活眼國民を警醒し一世を喚起して以て裨益を與ふるものはあらず八淵師は是れ方今佛教界の一大偉人今や佛教革新時代の衢に立ちて往を指し來を示すの一大偉人吾人の前に立つて而して此偉人の思想と希望とを天下に明にしたるものは即ち此書あり大方諸君今より刮目し此書の出るを嫉ちて以て一讀を切望す

發行所

京都市油小路北小路上ル

興教書院

興教書院出版發賣略目

粟津義圭師述

●通二河白道講話 (一名) 護信錄 (郵税) 拾六錢

曾て聞く義圭師兄弟三人あり而して一は漢學に達し一は文章に達し師は博學なる達辨にて常に三人の學力を棟て一の書籍を組織すと其利なる哉同師の説教書の天下に有名に去て其利行者の信心を守護せん爲の貪欲瞋恚の二河に譬を御説きあされしものなり故に此の御文を守護信とも云ふ既に御和讃に善導大師証をこひ定敬二心をひるがへし貪瞋二河の譬喩をどき弘願の信心守護せしむと云ふ、眞宗に取て實に安心に大關係ある御文を誰れにも能く解する様種々の譬喩因縁を諸書より引き師の能辯を以て講話せられしものなり

●眞宗法要 一名「眞宗假名聖教」

●背皮金文字入上等製全一冊實價金八十五錢 郵税十八錢 四卷トナシ和表紙付鉄入實價八十錢 郵税金十八錢 四卷トナシ並製本實價七十錢 郵税十六錢 (紙數千二百ペーシ) 眞宗法要ノ淨土眞宗ニ於ケル肝要ノ聖教タルハ今更ラニ茲ニ之ヲ云フヲ要セバ依リテ今縮冊トシテ一冊ト爲シ之レガ用ニ供シ併セテ他

ノ法味愛嗜ノ便益ヲ計リ製本モ三種ニ別テ爰ニ再刻ヲ爲シヌ元ヨリ活版ニ附スルハ誤植ノ恐アルヲ以テ殊更ニ專任ノ校正者ヲ置キ充分ニ校合ニ注意セシメ上板ス原本ハ龍谷藏版ノ大本ニ據リ卷尾ノ校異ハ各ソノ現文ノ上ニ標註ト爲シ句切ニハ、点ヲ附シテ數ハ大本ノ丁數ヲ關上ニ記シ行中)印ヲ以テ之ヲ明瞭ニス故ニ宗義研究ノ爲引文アルニモ少シモ差問ナシ以上ノ趣意ヲ以テ出版セシモノナリ

●遊如上慧の燈 かなつたれでもよめます 人縁起 實價金廿錢 郵税金四錢

淨土眞宗開山親鸞聖人より第八代の善知識中興蓮如上人は我戰國時特ニ諸宗諸山偏執の問に誕生ましく中絶したる淨土眞宗を再興せんと且暮心魂を勵し身を重なること盤石の如く雲の如く他力の法門を重なること盤石の如く御草鞋竹杖の御形にて在々所々の撰ひなく時機に投じ縁にふれ御化導遊され遂に再興の偉業を遂く今上天皇明治十五年三月二十二日勅して懸燈大師の諡號を賜ふ實に無量の慧燈を掲げて今この濁世の迷闇をてらし導き玉ふ明師なり今この書ハ上人一代の行狀一生の法話等を細記せる實録傳記なり當流に流を汲む有縁の士一讀の勞を取り遠く上人在世の御辛勞云何なりしかを思ひ來り指々御相讀心掛らるべし

廣告

●通安心決定鈔鼓吹 總平假名附たれで
俗安心決定鈔鼓吹 郵税金四錢

金廿五錢 蓮如上人の安心決定鈔のこと四十餘年が間御覽候へども御覽しあかぬと仰られ候又金をはり出す様なる聖教なりと仰られ候又當流の義の安心決定鈔の義いよく肝要なりと仰られ候ケ様なる大切の御聖教なれば人たやすく之を講せず然るに三部經鼓吹等を釋せられし釋了意師の安心決定鈔鼓吹八巻ありしも原版は焼失して今ひなし弊院幸に或師より一本を得たれば茲に縮刷す譬喩因縁の多きは同師の特意あり幸一木を購讀せられよ

●三妙好人傳 全二冊 實價金二十錢
郵税金六錢

善人の敵となることも悪人と交ひるなかれといふ金言あり。之れ凡情遷り易きが故に所對の物がらを撰べどあり。茲に數百餘人の妙好人。上々人最勝人希有人とも云はれ。本願他力易行の御教化を蒙り。目出度社生を遂げられたる善き言葉嘉さかこなひを集めたる妙好人傳と。常に交り友となられおは益滋味も愛樂せらるべし。

勸學善護師法話 福田行忍師輯録 實價金十六錢
郵税金四錢

●安心法話聞書 實價金十六錢
郵税金四錢

さを知らしめ益々教導の好良材を集め編を逐ひ巻を積み續々出版せんとするものなり先其が第一編として如達師勸導薄書元本二十冊を縮刷尙次編には能辨博識ある栗津義圭師等の説教書を出版す

大洲鐵然師題字勸學善護師。同坊園師述

●眞宗安心 實價金六錢
郵税金二錢

三業感の際金剛牌を著はして諸大學者をして口を閉ぢ舌を捲かしめたるは坊園勸學なり。東部と稱するも多年本書の師の安心及び安心に關する主節を輯録せしものあれば其氣韻の溢れて躍々、又善護師の安心數章を載す足利義山師述 赤松連城題字

●眞宗辨疑 實價金二錢
郵税金二錢

眞宗の安心は俗問に明答する精なることを要す。本書の俗問に應じて解し易く一々問答せしもの、實に各自了得の安心の眞假を決判するの明鏡なり。幸に一本を座右に備へよ。

●眞宗辨疑附録 實價金三錢
郵税金二錢

東陽圓月師述

●二諦妙旨談 實價金二十錢
郵税金二錢

●二諦妙旨談續編 近刊

廣告

出離の要路を教示し、各自の疑網を解滌せしめたる法語あり、一辭一言、安心の血肉にあらざるなし、それを補教行忍師隨聞隨記し函底に乞ふて印刷し廣く世に頒つものあり

●說教集錄 實價金十五錢
郵税金二錢

古今の名僧が滔々千里を踏破し、風生し水動くの辨を以て佛陀の眞理を開闡せし說教を集録せんが爲め、先づ第一編として菅原智洞師の勸化言々海及び同後編勸化文選等都合六巻を縮刷出版せり、無常を觀し、道心を起す詩歌譬喩因縁は編中跳梁飛ばんとし、跋扈舞はん

●見眞 大師親鸞聖人實傳 近刊

鳥地嘿雷師題辭 菅原加達說教

●說教學全書 第一編 實價三拾錢 郵税金六錢
五百ページ餘

人智開發し宇宙白般の學日を逐ひ歳を累ねて改良進歩すると共に諸般の學術講究の方法亦自ら迂濶の舊習を改め務めて簡便に從はん

●佛敎或問 五正價十二錢
郵税金二錢

右は某伯爵の依囑 大洲鐵然師が齋藤園精師に依頼せられし

佛敎大乘の義理を數十條の問答と爲し僧侶局外の人の爲に著述 大乘佛敎問答

もて平易に極めて簡短な近世人々の希望せる也解し易き總説の佛書に苦むの際讀者の利益蓋少小に非るべし 前田慧雲編述

●通大乘佛敎問答 正價金拾七錢
郵税金二錢

右ハ大乘究竟ノ法門即諸法實相ノ道理ヲ極メテ平易ニ説キ明シテ尙ホ其上ニモ少シ難解ノ嫌アル文字章句ニハ丁寧ニ注解ヲ加ヘ餘論ヲ付シタル者ナレハ佛敎青年會或ハ諸宗小敎校ノ初等科ノ用書ニハ至極恰好ナリ

●再眞宗說略 正價金十錢
郵税金二錢

右は再修と日ふと文學寮に於て講述せり交へて原本を刪補せし者にて其序論及本論中の總述の如きは全く新文字なり且更ニ結論

三

の一章を加へて當時の國家的宗教は世人の喋々する所の本願寺勤王事蹟と云ふより遂に本願寺勤王事蹟を擧て之を論明せし者なれば尙も宗教に志ある者は請ふ一讀の勞を執れ

● 選擇集指津錄

卷ノ一巻ノ二出來 (鮮明木版)

吉水大師、臨白齋實公ノ請ニヨリテ一タヒ筆ヲ阿シテ撰擇集十六草ヲ草ス、淨土門ノ骨目、深意幽教、鑽ニ窺フベカラズ、故ニ古來ノ學哲畢生ノ智腦ヲ絞リ之ヲ解釋スルモノ多シト雖モ煩ニ過キ略ニ失シ學者ノ恨ミトスルコト久シ、善哉勸學ノ指津錄、俗ニ閑學記ト云フハ能ク一局面ヲ開キ煩ニ過キズ略ニ失セズ、而モ義理明瞭、大師ノ深意ヲ汲ムヲ得且ツ本書出版ハ閣下司教善海師ニ得タレバ誤謬ナシ

● 御文章 五帖一部一冊薄用上等 卅錢
郵稅四錢並紙廿四錢郵稅六錢

● 懷中正信偈和讚 帙薄用拾八錢
入郵稅貳錢 正價貳錢

● 御傳鈔 右三書此迄種々アルモ誤字多シ依テ今般弊院ニ於テ某師ニ充分ナル訂正ヲ請ヒ鮮明ナル木版ニテ出版ス

● 原人論講義

岸上師講義 ● 實價金廿五錢 ● 郵稅金六錢 ● 四號活字紙數二百四十一頁

宗密禪師、原人論ヲ著す、言簡意密、蓋し佛教の全體を網羅すと云ふべし、故に之を解釋する、又困難にして古來辨明演繹するもの其數を知らず、然れども或は高尚は失して不辨を學徒に與ふること多ク、岸上師ハ佛門の碩學而も本書を講述するに當り、意密かに言安く專ら初心の領解し易きを要し通俗の俚言を用ゆ、且つ巻尾にハ附錄或問とし本文外の疑問數條を掲載し、泰西哲學、耶穌教を較へ來り、斥邪の論法に至りて秋霜光あり、佛門の如著、幸に一本を購求あれ、又佛教青年會等の講本には至極適當せる良書なり

● 通御文章鼓吹

總かたつぎ 一名眞宗安心の龜鑑

代壹圓七十五錢 ● 金文字入上等製は別々金十五錢を申受くと等製は郵送出來ず小包或は通運にて送る

● 淨三部妙典鼓吹 實價四圓

● 善惡因果經鼓吹

實價四十五錢 郵稅八錢

● 正信念佛偈鼓吹

實價四十錢 郵稅六錢

● 香雲院澄玄師述

● 正信偈法話

實價金四十五錢 郵稅金六錢

當流に流を汲ひ信者朝夕拜讀し奉る正信偈は句の數百二十、行數六十行にして三朝高僧の解釋により眞宗の要義大綱を明すと雖其理深くして容易に了解しがたし之に依て古より註釋するもの其數を知らず然れども皆學門的にして通俗に註解するもの少し今行二書ハ譬喩因縁等を交へ通俗に了解し得らる、良書なり

● 勸學南溪師述

● 宗教一雙眼

合 實價十二錢 本 郵稅四錢

● 眞假三願高祖眼

右ハ師ガ本典ヲ講述スルニ五大法門ヲ以テ七祖ノ傳承高祖ノ集成トシ一部六卷ノ大綱セラレシヲ桐堂範公師ノ請ニ應ジ更ニ畧シテ其一端ヲ記シテ本典研磨ノ便ニセラレシモノナリ

● 赤松連城師序文士中川太郎譯述

● 亞細亞之光輝

實價十五錢 郵稅一錢

● 明三慧師著

附七高祖並蓮師略歴

右ハ御開山聖人ノ御傳記即チ御傳鈔ヲ略解シ且ツ御降誕ヨリ御入滅後二十六年迄ニ何百何十年目ト云フヲ明記セシ年譜ナリ

● 御傳鈔簡要 實價六錢 郵稅二錢

● 各家佛教演說

實價十八錢 郵稅金四錢

右ハ島地默雷師、赤松連城師、村上專精師、吉谷覺壽師、大洲鐵然師、齋藤開精師、中西牛郎氏、二二三盡演師、弘中唯見師、鈴木法宗師、加藤惠證師、徳永滿之氏、武田篤初師、井上圓了氏等の有益ある實地演說を筆記したるものなり尙總ひらかなを付け誰人にてみ得る實に數百里の遠隔の地にありながら近世諸大徳の演說を座しながら聴せられ得るハ此書にしくはなし

● 各宗教略話 上卷

實價金拾錢 郵稅金二錢

● 各宗教略話 下卷

實價金拾錢 郵稅金二錢

● 國宗教略話

實價金拾錢 郵稅金二錢

右ハ師ガ歐米各國ハ宗教研究の渡爲行せし記

中各國各宗教の尤も必用なる起源及び現勢に付實地探究せし略話あり苟も宗教に志あるもの佛敎者は元より耶蘇敎者と雖も一讀すべき書なり

○尙附録として洋行手續書類、各國金銀比較、及び里程船中所持必用品等を記載せり

●印度部
實價金三錢
郵税金二錢
郵税二錢

●英國部
右は各國宗教客話の内印度の部及び英國の部を別冊にせしものにして何人たりとも讀安き様假名を附したるものあり

赤松連城師題歌 松島善海師序文
釋慧晃師講述

●再版 ●改悔文講話
實價六錢
郵税二錢

改悔文は淨土眞宗中興上人の著述し玉ふ御詞にして一流安心の極致、敎行信證の要義この一章に攝在せり、釋慧晃師流麗なる文字を縦横と動かし、深を探り義を窮む、學者の携ふべき書なり、

佐々木惠雲緝

●古德法語集 第一編 實價十三錢
郵税二錢

附録近世大家法話
神代洞通輯

●古德法語集 第二編 同
佐々木英鏡師題字 佐々木惠雲緝

●古德法語集 第三編 同
佐々木惠璋佐々木惠雲共纂

●古德法語集 第四編 同
佐々木惠璋佐々木惠雲共纂

●古德法語集 第五編 近刊
古德法語集は出離生死の導師なり、古德法語集は座右必携の經規なり、古德法語集は僧俗共に必要書なり、古德法語集は讀易き爲假名附なり、古德法語集は説敎演説の爲により、

●再版 ●版源頭論 本(全一冊)
實價十六錢
郵税金四錢

二名折疏立信論といふ、先哲大坂華藏閣月峯師の著述にして其說確其文明晰宗學の秘奧説盡して餘蘊なく宗徒たる者勿論苟も宗學に志ある者は座右に欠くべからざる良書あり尙其目次の一、二を掲げば○諸佛の最初何なる佛なるや○衆生の未だ淨土に生ぜざる已前は唯阿彌陀如來の一跡のみ淨土に在すべきや等あり

●通三世因果實驗錄 實價十二錢
郵税二錢

●寒風夜話 定價三錢
郵税二錢

獨逸スプハトヲ比丘原著
日本園田宗惠君譯

●佛教要論 實價十八錢
郵税四錢

鎌田淵海師

●佛教青年活演説 實價五錢
郵税二錢

中西牛郎著

成院仰書師著

●三帖和讚略解 正價三十五錢
郵税六錢

三帖ノ御和讚ハ吾祖師聖人ノ智慧報徳ノタメニ御製作アソハサレタルモノニテ其文字平易ニシテ其義深奥ニ其言近シテ其旨遠シ是ヲ以テ古來此ノ御和讚ヲ註解スルモノ多シ就中寶成院仰書師ノ略解ハ簡短ニシテ然カモ其深旨ヲ審ニシ尤モ了解分明ナリ

●三帖和讚方軌 正價一圓三十錢
郵税十八錢

寶池閣覺照師述半紙本全四冊

●三帖和讚雁峰錄 正價一圓十錢
郵税十四錢

吉谷覺壽師述全三冊

●三帖和讚講述 正價一圓二十錢
郵税十四錢

佛敎總論 正價二十六錢
郵税四錢

熱田靈知師校閱 朝日保寧著

●敎師四論題略辨 代金三錢
郵税二錢

右ハ信心正因 ○信願交際 ●王法爲本 ●倫理大旨の略辨なり

本法院義理師著

●佛教大勢論 同 十六錢

●組織佛教論 同 四十五錢

●新佛教論 同 三十五錢

●佛教大難論 同 六十五錢

●敎育衝突斷案 同 二十五錢

●世界三聖論 同 四十五錢

●宗教革命論 同 二十五錢

同 四十六錢

同 三十五錢

同 六十五錢

同 二十五錢

同 四十五錢

同 二十五錢

前田慈雲師著

●真宗教史序論

正價十六錢
郵稅四錢

右ハ真宗の教理を歴史的に論述したる者なり

●真宗苑談叢

正價廿四錢
郵稅四錢

右ハ真宗ノ近世ノ學者ノ事蹟行狀ヲ記シタル書ナリ

●真學匠著述目錄

正價六錢
郵稅二錢

●學佛南針

正價六錢
郵稅二錢

右ハ大乘小乘實教權教聖道淨土等ノ同異ヲ論シタル書ナリ

●真學統源流畧譜

正價六錢
郵稅二錢

●真宗問答

正價金十五錢
郵稅四錢

全編一百四十の問答より成れり初め真宗歴史の大略を明し次に真俗二諦の法門を論述し後に餘論として哲學上宗教上道德上國家上より耶蘇教と比較對論せり

●真宗道德新論

正價二十五錢
郵稅四錢

●真宗佛性辨講述

正價金八錢
郵稅貳錢

大乘實教ノ道理ニ依テ佛性ノ義ヲ説明シテ真宗ノ教理モ亦是ト毫モ差異アルモノニ非サルノ理ヲ辨述シタル書ナリ

●真宗列祖法門大綱

正價金八錢
郵稅貳錢

●大無量壽經大意

正價貳拾六錢
郵稅四錢

真宗ノ正依經ノ大意ヲ和述シタル書ナリ

●真宗勤行集

實價三錢郵稅二錢
(三冊迄)郵同

右ハ少年教會用ニシテ○正信偈○念佛偈御和讃○御文章○改悔文阿彌陀經○三寶偈○其他偈文等ヲ集メ極メテ簡ニ且廉價ヲ旨トシテ出版セシモノナレバ續々御申込アレ

●勸正信偈御和讃

實價二錢郵稅二錢
(四冊迄)郵同

●教誨美譚

實價三錢
郵稅四錢

●同第二編

同四錢

●成就文講話再演

實價十二錢
郵稅二錢

●佛敎活論序論

實價四錢
郵稅四錢

七里恒順師述

●念佛處世之用心

實價四錢
郵稅二錢

●通俗佛敎百科全書

實價六十錢
郵稅六錢

●說教演說砂石集

實價四十五錢
郵稅四錢

●真宗要書

實價八錢
郵稅六錢

●人道德談話集

實價廿六錢
郵稅六錢

右悉皆賣切れ候に付今般挿繪を加へ代價を引下げ再版仕候間續々御購求あらんことを請ふ

●王法正論

實價三十錢
郵稅八錢

●治國之要

實價三十錢
郵稅八錢

●勤學遠照院述

實價十五錢
郵稅四錢

●二一河譬略解

實價十五錢
郵稅四錢

●井上圓了君著

●禪宗哲學序論

定價三十錢
郵稅四錢

●磯部武者五郎君著

●政教時論

定價二十錢
郵稅二錢

●岡本監輔君著

●耶蘇教新論

定價二十錢
郵稅二錢

井上圓了著

●佛敎活論本論

定價二十五錢
郵稅四錢

●心理摘要

定價四十五錢
郵稅四錢

●哲學要領

定價四十五錢
郵稅四錢

●同

定價四十五錢
郵稅四錢

●宗教新論

定價四十五錢
郵稅四錢

●妖怪立談

定價二十五錢
郵稅二錢

●哲學一夕話

定價二十四錢
郵稅二錢

●哲學道中記

定價二十二錢
郵稅二錢

●星界想遊記

定價二十二錢
郵稅二錢

●哲學一朝話

定價二十二錢
郵稅二錢

●顯正活論

定價五十二錢
郵稅七錢

●倫理摘要

定價四十六錢
郵稅四錢

●真宗哲學序

●日本倫理學案

●教育宗教關係論

●忠孝活論

●妖怪學緒論

井上瑞枝女史著

●心の露

大内青樹君著

●若般心經講要

藤島了隱著

●耶蘇教末路

神崎一作君集

●破邪叢書

●同第二集

關阜作君編

●井上と基督教徒

定價 三十錢

定價 四十錢

定價 三十五錢

定價 二十五錢

定價 七錢

定價 二十五錢

定價 二十二錢

定價 四廿錢

定價 四十五錢

定價 四十五錢

定價 六十五錢

定價 廿八錢

●同上續編

村上專精師著

●佛教忠孝編

●文類聚鈔百二十題決擇記

●因明學全書

●大乘教起信論達意

●因果理法論

●安心立命談

辰巳小次郎著

●哲學茶話

●印度哲學小史

吉谷覺齋著

●明治諸宗綱要

●正信偈講述

定價 廿八錢

定價 三十五錢

定價 六錢

定價 六十錢

定價 四十錢

定價 四十錢

定價 二十七錢

定價 二十五錢

定價 四十錢

定價 三十五錢

定價 四錢

釋雲照著

●佛教大意

●十善業道經

赤松連城師述

●勅語衍義

東陽圓月師述

●勅語奉躰記

織田得能著

●四教儀和解

●暹羅佛教事情

●大乘起信論和解

●原人論和解

鳥地默雷 織田得能 合著

●三國佛教略史

平松理英著

●三河廻瀾始末

大瀨 廻瀾始末

山田孝道譯

定價 二十五錢

定價 二十錢

定價 四錢

定價 二四錢

定價 二六錢

定價 十五錢

定價 二十錢

定價 三十錢

定價 四十五錢

定價 八錢

定價 五十錢

定價 四錢

●言文一致原人論新譯

●死及死後

文學士 澤柳政太郎著

●佛敎十善大意

道徳 和譯

●佛遺教經

西村茂樹著

●日本道德論

井上哲次郎著

●教育と宗教の衝突

寺田福壽著

●人生の目的

●善惡之標準

小栗憲一師著

●真宗興隆緣起

一名稻田舊 跡略緣記

●小栗栖香頂師演說

●朝家の御爲

定價 二十錢

定價 二十錢

定價 四錢

定價 二十五錢

定價 三十五錢

定價 四錢

定價 三十錢

定價 二十五錢

定價 三十錢

定價 二十五錢

定價 三十錢

定價 四十五錢

定價 六錢

定價 四十錢

定價 六錢

定價 十錢

定價 十錢

●第二集近刊●定價十錢郵稅不要

●末代御文說教 正價三十錢

●二帖目御文說教 上卷 正價三十錢

●二帖目御文說教 下卷 正價三十錢

●第四通御文說教 下卷 定價三十錢

●宇宙之光 全一冊 正價四錢

●御國之光 全一冊 實價四錢

●塵外對話 正價六錢

●フオン 佛教演說集 正價四錢

●英四十二章經 正價二錢

●寶章論題 全五冊 郵稅四錢

右兩書ハ我宗内ニ於テ最モ必要ナル論題ヲ集

メタル書ニシテ續々御注文アルモクシク絶版セシヲ以テ大ニ佛者ノ遺憾トセラレシ處ナルガ今般更ニ本院ニ於テ再版致候間續々御申越被下度候

●清涼遺芳 全一冊 郵稅四錢

●唯三十領錦花 全一冊 郵稅四錢

●釋尊靈蹟真圖 全一冊 郵稅四錢

●釋尊靈蹟真圖 全一冊 郵稅四錢

●釋尊靈蹟真圖 全一冊 郵稅四錢

●釋尊靈蹟真圖 全一冊 郵稅四錢

●釋尊靈蹟真圖 全一冊 郵稅四錢

●釋尊靈蹟真圖 全一冊 郵稅四錢

●釋尊靈蹟真圖 全一冊 郵稅四錢

●釋尊靈蹟真圖 全一冊 郵稅四錢

●釋尊靈蹟真圖 全一冊 郵稅四錢

每號有リし圖を別冊として右注文者一冊づ、呈送すべし

●小栖香平君譯述 學教史論 全一冊 四十五錢

●英立雪師編 佛陀金言 全一冊 二十五錢

●佛敎演說 (一名活如來活說法) 全一冊 卅五錢

●大家佛敎演說集 全一冊 十六錢

●佛敎新演說 全一冊 四十八錢

●德永滿之君著 宗教哲學骸骨 全一冊 十二錢

●演說大家加藤惠證口述 增補木佛畫像論 全一冊 十二錢

●加藤惠證著述 佛教德育科書 全一冊 十二錢

●釋尊御傳記故福田行誠師校閱

●三世の光 全五冊 七十錢

●親鸞上人御一代記圖繪 全二冊 十四錢

●蓮如上人御一代記圖繪 全二冊 十四錢

●三七高僧實傳 全二冊 四十五錢

●見真大師御繪傳勸說 全一冊 六十五錢

●見真大師御繪傳祥指錄 全一冊 六十錢

●四福御繪傳祥指錄 全一冊 六十錢

●全 上 (海用紙) 全 二十六錢

●中西牛郎君主筆
●經世博議合本 (第一卷) 全 十五錢
●全 (第二卷) 全 十五錢

●法之園合本四冊出來
右一冊二付四十二錢郵稅八錢宛
勸學實行院僧朗師講述 司教香川葆晃師校訂
●蓮如上人御一代記聞書略解

●第四卷出版 全五冊之内第四卷迄出版
實價各拾五錢郵稅各四錢
島地默雷師校 原口針水師著
大洲鐵然師題字

○タノム、タスケタマへ考 實價二十五錢 郵稅四錢
赤松連城師題辭 正聚房僧純師述
●繪入 教訓孝行の道話 表紙石版摺全壹冊 實價金拾六錢 郵稅四錢

●御裁斷御消息法話 價 廿二錢 郵稅 二錢
●大洲鐵然師題字 佐々木量俊師編輯

●活用説教 價金 十二錢 郵稅 二錢

●全 第二編 價金 十三錢 郵稅 二錢
●少年修身はなす 價金 十四錢 郵稅 二錢
●利井明朗師題字赤松連城師序文 價金 十四錢 郵稅 二錢

●和清九郎實傳 價金 廿四錢 郵稅 四錢
●利井明朗師題字 足利義山師著 價金 廿四錢 郵稅 四錢

●眞宗俗問 價金 六錢 郵稅 二錢
●勸學針水師校閱 司教鮮明師題字 價金 六錢 郵稅 二錢

●四題蹄筌 價金 八錢 郵稅 二錢
●鎌田淵海師著 價金 八錢 郵稅 二錢

●佛教少年演説 價金 三錢 郵稅 二錢
●利井老和上贊 藤井正眞師編輯 價金 三錢 郵稅 二錢

●一休叢話 價金 十四錢 郵稅 四錢
●島地默雷師題字 鎌田淵海師議長 價金 十四錢 郵稅 四錢

佛敎與國策

八洲蟠龍著 (一葉版三百頁) 近刻
右今今八洲師が米國宗教大會に臨みて大いに感慨し知識的社會物質的三大革命の歳晚第十九世紀の終期既に各其任務を了り第二十九世紀の頭更に宗教的の大革命を發動し來り人類の思想はこれに由りて一變を文化氣運に由りて一轉し我佛敎は將來に於て世界列國に由りて一命運上に最大影響あるを看破し更に此の國家運上人心惶惑するの中心に立ちて日本帝國千載不拔の礎を建て外は拓殖の遠征を以て内は國家の鴻基を立て外は拓殖の遠征を促すの一事をあると看破して百感千想交々集り熱血の注ぐ所自ら此一書を爲せり從來佛敎の著書抄らずと雖も未だ斯書の如く卓見活眼國民を警醒し一世を喚起して以て釋教を興ふるものはあらず八洲師は是れ方今佛敎界の一大偉人今や佛敎革新時代の嚮に立ちて往を指し來を示すの一大偉人吾人の前に立つて而して此偉人の思想と希望とを天下に明らかにしたるもの即ち此書をかり大方向諸君より割目し此書の出るを嫉ちて以て一讀を切望す

宗教大會報道

八洲蟠龍師演説 價金 六錢 郵稅 二錢
米國シカゴ萬國宗教大會に出席し師が卓見を以て現時歐米社會を觀察せられし所感を有るの求に應じ知恩院千疊敷に於て數千の聴者をして感慨せよめたる有益なる報道演説筆記なり

●説敎學全書 第二編 價金 六錢 郵稅 二錢
右正義主師が三經七祖の肝要の文を讀題として説敎せられたる帳中五十座法談。卷懷五十座法談を訂正標註したる百座の説敎良書なり 眞實院 關師述

●眞宗安心大要 價金 六錢 郵稅 二錢
右は三業感亂の節に關し眞宗安心の大綱を府朝へ早進せられしものなり

●本願成就悅草 價金 二錢 郵稅 二錢
右よろこび草。故法界庵夢遊師か。超世の本願成就し玉ひ。七寶淨土へ導き玉ふ。經論祖釋の御いしを。誰人にも能く解する様。但言に似し。一味同行もろもに。御相續のよろこび草とせられしものなり

●往淨土悅草 價金 二錢 郵稅 二錢
右よろこび草。故法界庵夢遊師か。超世の本願成就し玉ひ。七寶淨土へ導き玉ふ。經論祖釋の御いしを。誰人にも能く解する様。但言に似し。一味同行もろもに。御相續のよろこび草とせられしものなり

18
398

栗津義主師述
御傳鈔講話

冊二全

實價 金五十錢
郵税 金八錢

此の御傳鈔上下十五段は。第三宗 覺如上人
報恩謝徳の爲。當流の法儀他方安心の深旨
を。聖人御一代の行化に寄せ。讃嘆せられた
るものにして。聖人滅後六百余年の今日。親
り聖人御在世の御行狀を。拜讀するを得るハ
實に覺如宗主の賜なり。然れども其文簡短
なれば。我々其委細を知る能はず。然るに今
此の講話は。義主師内典外典諸書を纂涉し。
聖人御化導の事蹟。開宗の模様等。細大漏す
なく。師の能辨博識を以て。誰れ人にも能く
解する様。讀因縁を交へ。説教せられたる
ものなり。故に當宗に流を汲む者。此書を讀

み聖人御一代の御辛勞を知り。益々法味愛樂
の助縁となされん事を乞ふ

●萬國宗教大會義

豫約代金三十二錢
郵税 金四錢

●眞宗大意

定價 金八錢
郵税 金二錢

石は當年米國シカゴ萬國宗教大會義に付海外
宣教會發起にて日本全國の有志者より外國に
旅本とし赤松蓮城師の眞宗大意。加藤正壽師
の眞宗問答。前田惠雲師の眞宗綱要を。翻せ
しものなれハ眞宗の法門の大要を知るを得る
長書なり

注意 一御送金の節爲換ハ六條ニ限ル名宛ハ興
教書院ノ事

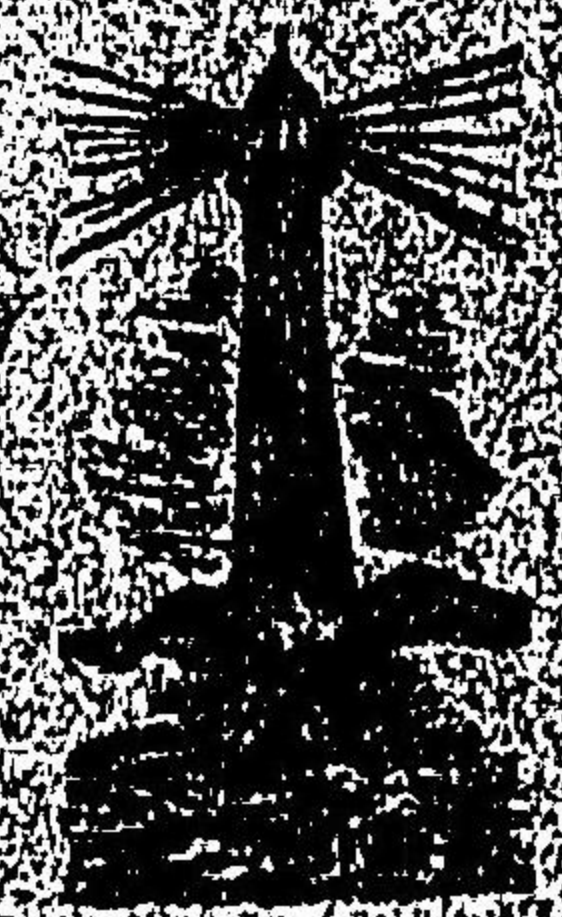
注意 一通郵便ニテ御送金ノ節ハ配達料共相添
御差出ノ事

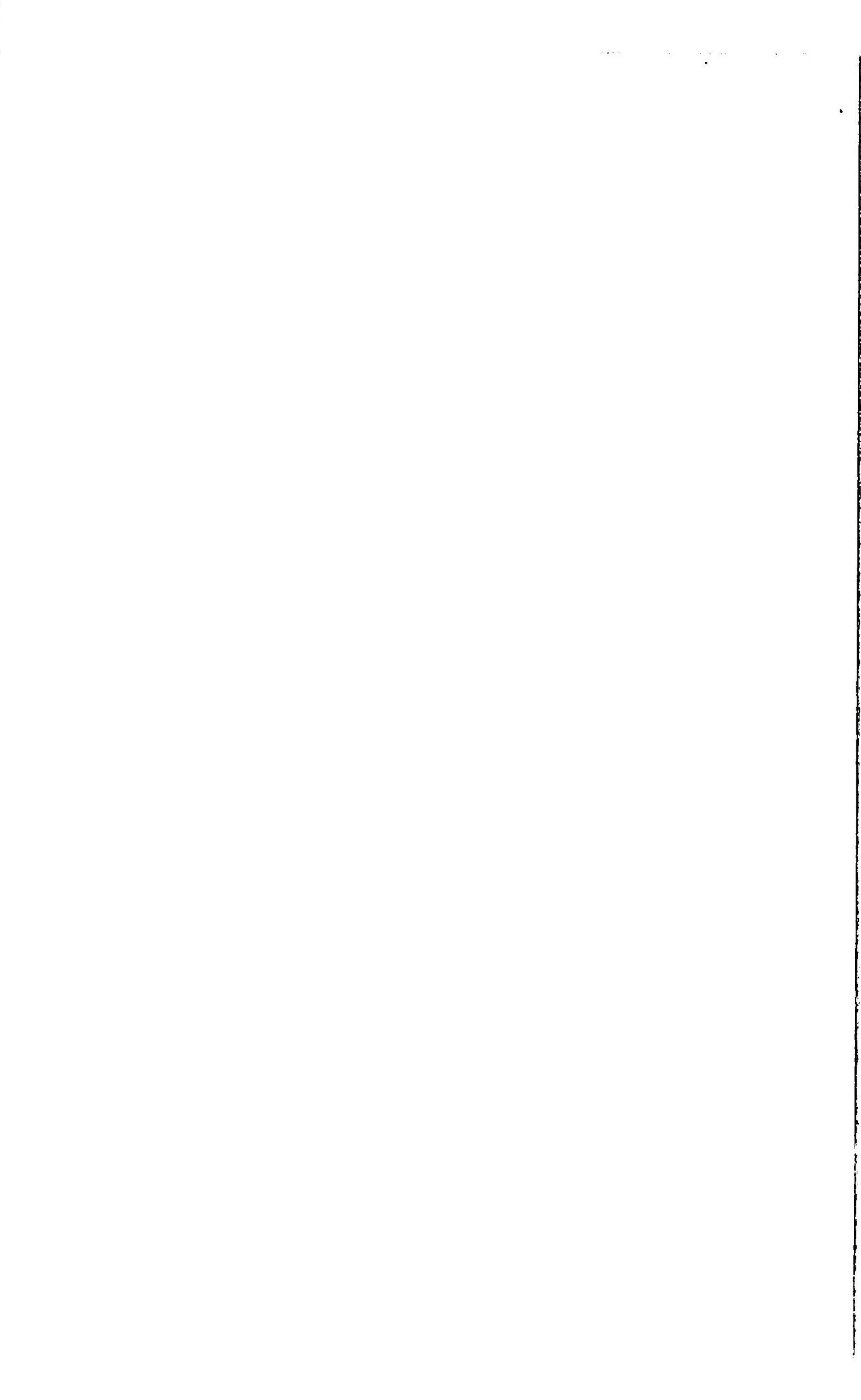
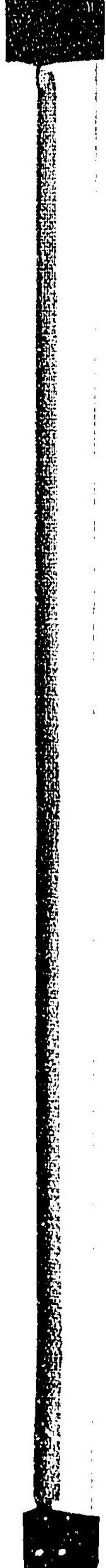
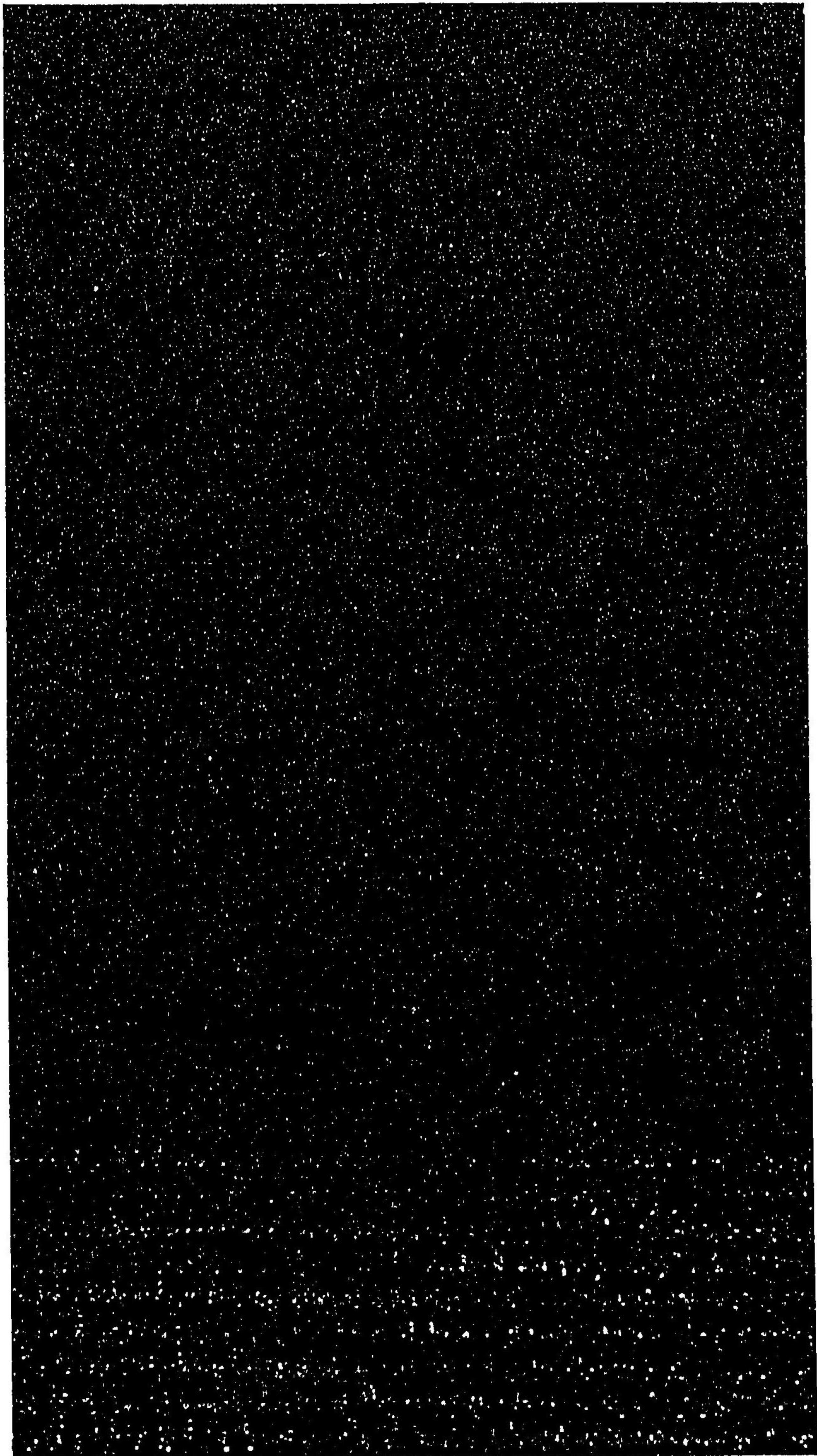
注意 一總テ御照會ノ節ハ往復はかさ或ハ印紙
封入ノ事

京都油小路北小路上ル

興教書院

I 1254







18

398

Ⓜ

宗教大会報道

国立国会図書館

013621-000-2

18-398

宗教大会報道

八淵 蟠龍/述

M27

ABA-0090

